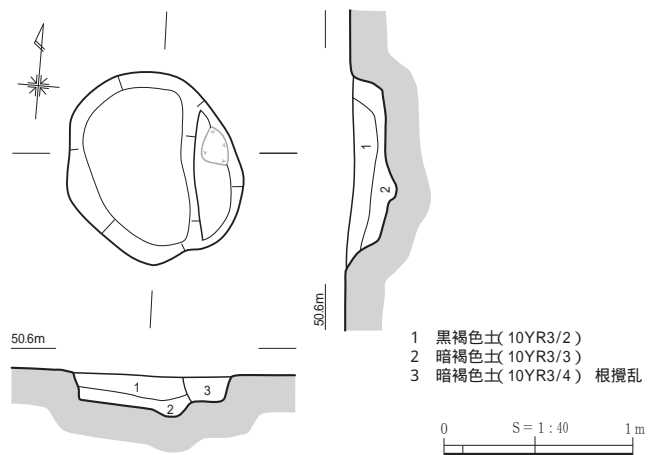


第114図 SK32出土遺物

SK33(第115図、PL.34)

4区中央のD18・E18グリッドにあり、標高50.5m付近の下部平坦面に立地する。弥生時代中期の遺物を包含するクロボク層(4層)を除去した後の、ソフトローム層で検出したが、本来は、クロボク層中から掘り込まれたものとする。西側約1mにはSI6、南側約1mにはSK30が隣接する。

平面は楕円形を呈し、長軸1.03m、短軸0.89



第115図 SK33

mを測る。断面は逆台形状を呈し、深さは最大0.15mである。底面は一部段差を持つ。

埋土は、暗褐色から黒褐色土系の2層に分層できた。皿状に堆積していることから、自然堆積したものと考えられる。

遺物は出土していないが、周辺の遺構の状況から、弥生時代中期後葉のものと考えられる。用途は不明である。

SK35(第116・117図、PL.35・59・62)

3区西側のC15グリッドにあり、標高49.9m付近の下部平坦面に位置する。表土除去後のホーキ層で検出した。西側約8mにはSK15がある。

平面は隅丸長方形を呈し、長軸1.49m、短軸1.37mを測る。断面は逆台形状を呈し、深さは最大0.39mである。底面は平坦である。

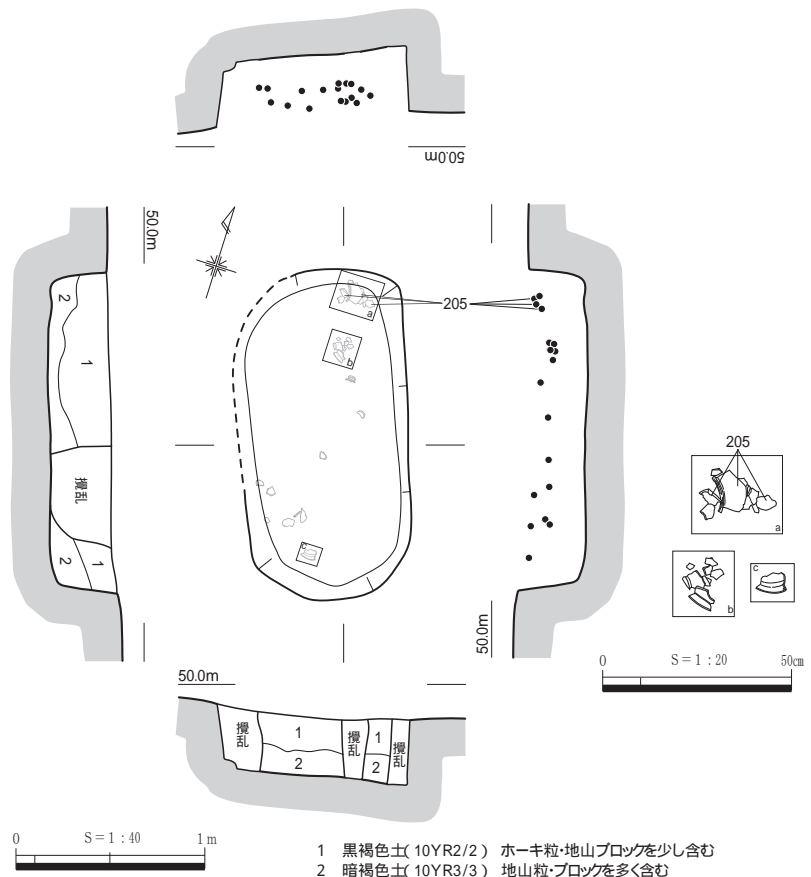
埋土は、暗褐色から黒褐色土系の2層に分層できた。皿状に堆積していることから、自然堆積したものと考えられる。

埋土中から、弥生土器甕204・205、甕底部206・207が出土している。いずれも破片の状態で出土している。

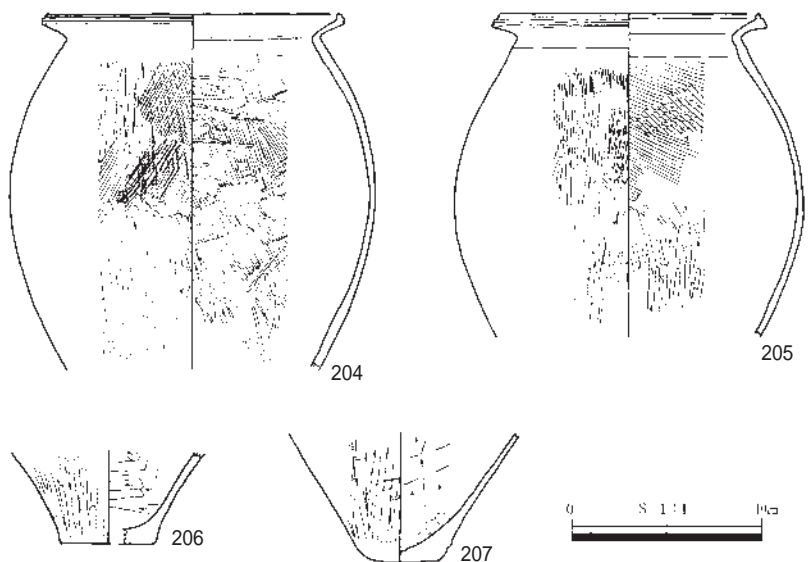
出土遺物から、清水編年 - 1様式、弥生時代中期後葉のものと考えられる。本来の用途は不明であるが、廃棄土坑として使用されたものと考えられる。

SK35(第118・119図、PL.35・61・82)

3区中央やや西寄りのC14グリッドにあり、標高49.4m付近の谷部に位置する。旧耕作土を除去した後の谷堆積層である層で検出した。西側約13mにはSK35がある。



第116図 SK35



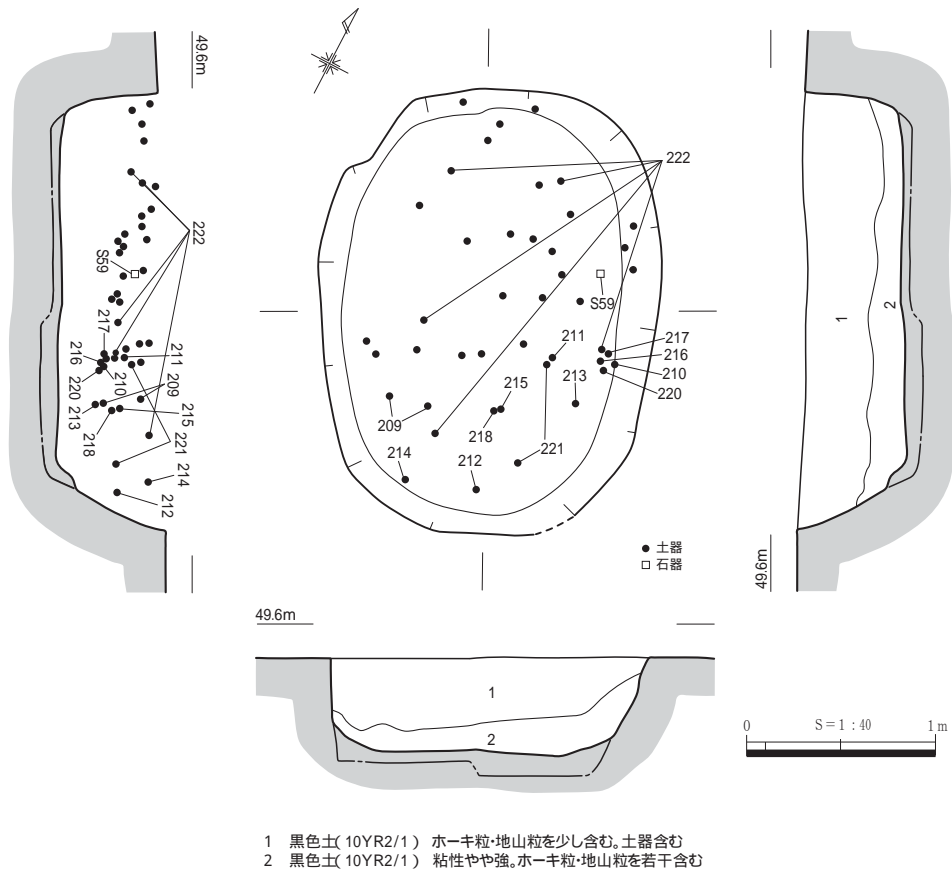
第117図 SK35出土遺物

第3章 調査の成果

平面は隅丸長方形を呈し、長軸2.26m、短軸1.79mを測る。断面は、逆台形状を呈し、深さは最大0.45mである。底面は平坦である。

埋土は、黒色土系の2層に分層できた。皿状に堆積していることから、自然堆積したものと考えられる。

埋土中から、破片の状態で弥生土器等が出土している。このうち、弥生土器壺208～212、甕213～216、底部217～221、高坏222、サヌカイト製石鏃S59を図化した。



第118図 SK39

出土遺物から、清水編年 - 1 様式、弥生時代中期後葉のものと考えられる。本来の用途は不明であるが、廃棄土坑として使用されたものと考えられ、同様の立地のSK22に類似する。

SK47(第120・121図、表26、PL.35・63・84)

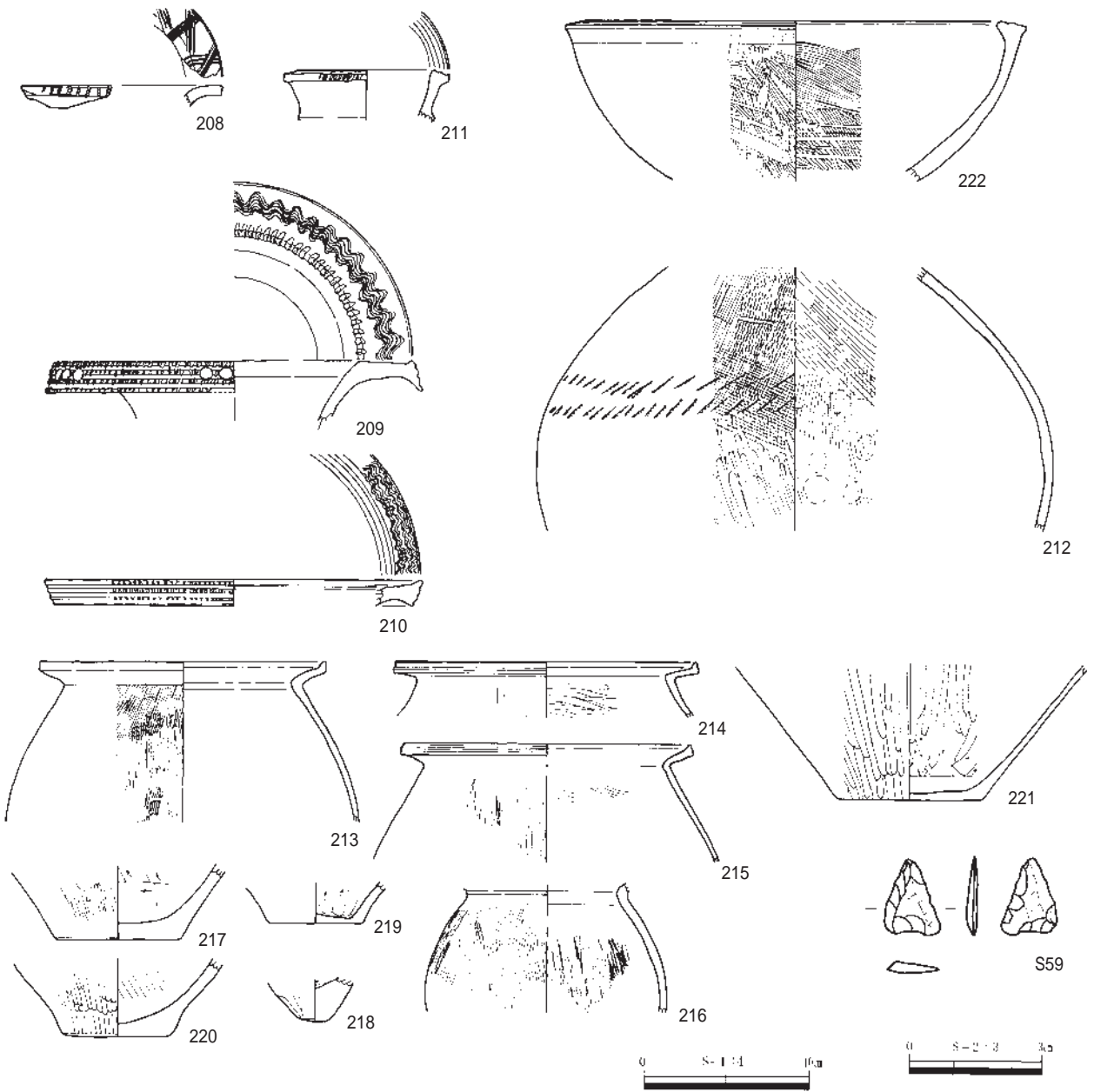
3区南東側のD12グリッドにあり、標高50.8～51.6mの斜面部に位置する。造成土を除去した後のソフトローム層で検出した。南側はSK48に掘削され、北側はSD4に接続する。西斜面部は流失している。

西側が流失しているため全形は不明であるが、平面は長方形を呈すものと考えられ、長軸2.76m、短軸2.2m以上を測る。形態的にはいわゆる方形土坑である。壁際面側には、幅30cm程度の不明瞭なテラスを設ける。断面は逆台形状を呈し、深さは掘り込み面から最大0.55m、テラス面から0.26mである。壁際には、幅7～16cm、深さ4～6cmの溝が巡る。底面は平坦で、ピットが掘り込まれているが、伴うものが不明である。

埋土は、黒色から黒褐色土系の4層に分層できた。皿状に堆積していることから、自然堆積したものと考えられる。

埋土中から破片の状態で弥生土器などが多数出土している。このうち、弥生土器甕223、敲石S60を図化した。

出土遺物から清水編年 - 1 様式、弥生時代中期後葉のものと考えられ、切り合い関係からSK48に先行するものである。本来の用途は不明であるが、廃棄土坑として使用されたものと考えられる。



第119図 SK39出土遺物



文中写真8 平成22年度2区作業風景(2)

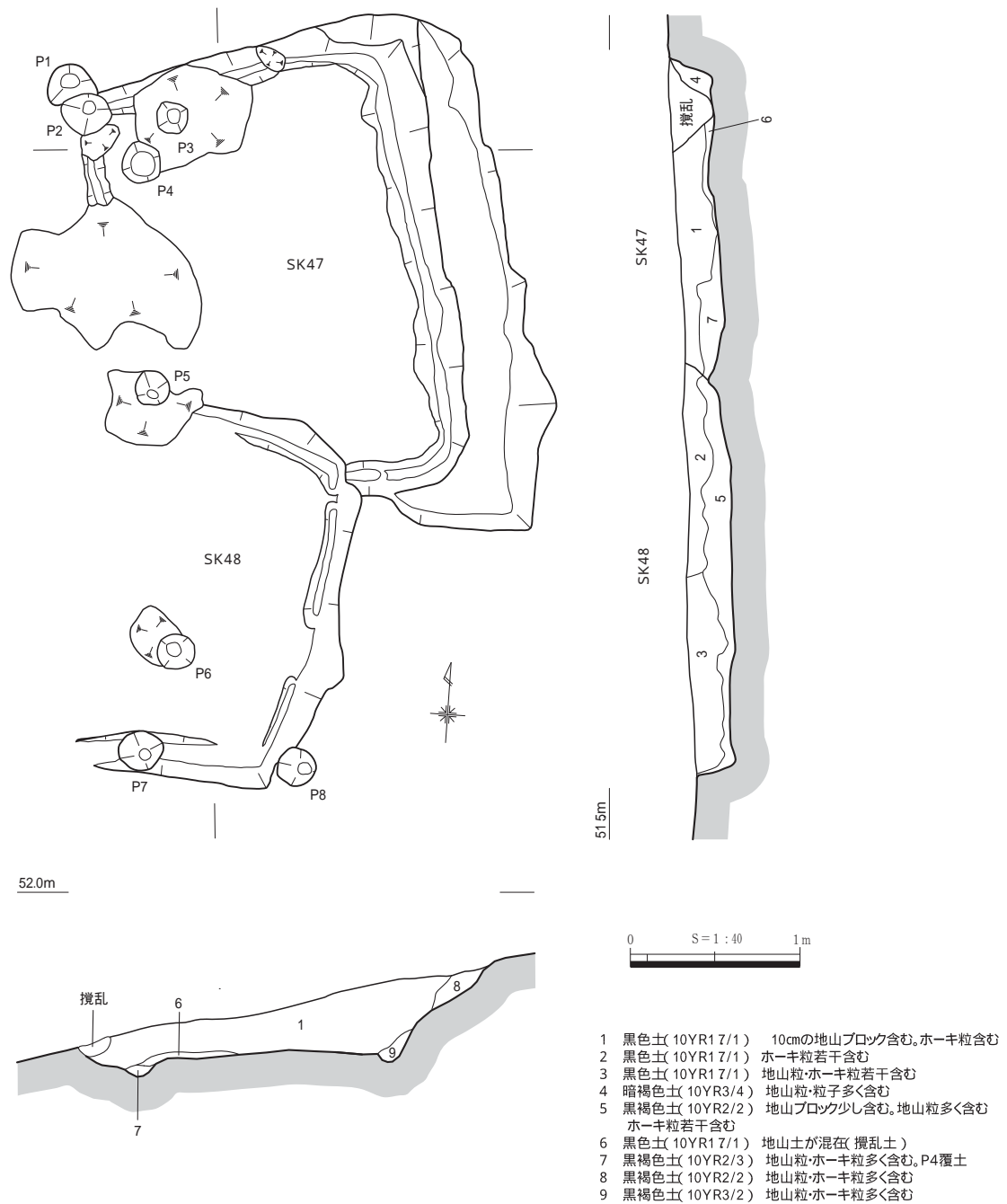
第3章 調査の成果

表26 SK47ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考
P 1	27×20-17	
P 2	30×25-21	
P 3	18×18-13	
P 4	23×23-21	
P 5	21×20-12	

表27 SK48ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考
P 6	22×21-13	
P 7	27×23-22	
P 8	22×22-48	



第120図 SK47・SK48

SK48(第120・122図、表27、PL.35・62・63)

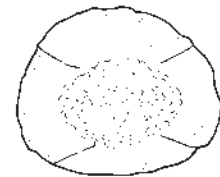
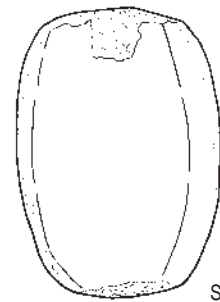
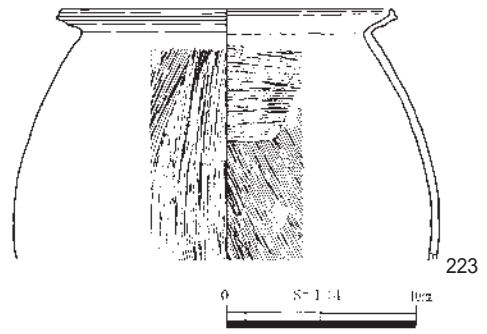
3区南東側のD12グリッドにあり、標高50.8～51.6mの斜面部に位置する。造成土を除去した後のソフトローム層で検出した。北側はSK47を掘削している。西斜面部は流失している。

西側が流失しているため全形は不明であるが、平面は長方形を呈すものと考えられ、長軸2.21m、短軸1.3m以上を測る。形態的にはいわゆる方形土坑である。断面は逆台形状を呈し、深さは掘り込み面から最大0.29mである。壁際には、幅7～10cm、深さ3～5cmの溝が巡る。底面は平坦で、ピットが掘り込まれているが、伴うものが不明である。

埋土は、黒色から黒褐色土系の4層に分層できた。皿状に堆積していることから、自然堆積したものと考えられる。

埋土中から破片の状態での弥生土器などが大量に出土している。このうち、弥生土器甕224～226、壺227を図化した。

出土遺物から、清水編年 - 1様式、弥生時代中期後葉のものと考えられる。切り合い関係からSK47に後続するものである。本来の用途は不明であるが、廃棄土坑として使用されたものと考えられる。

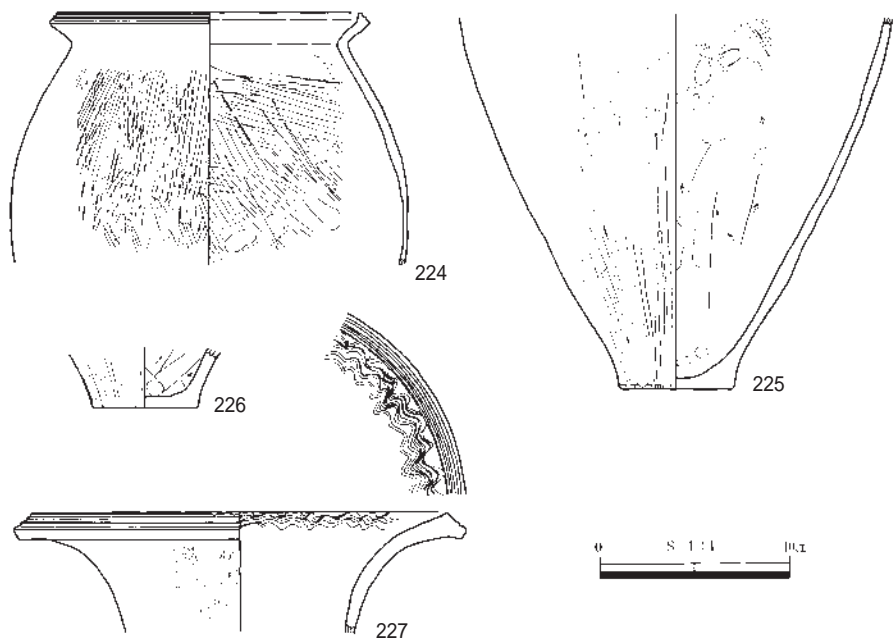


第121図 SK47出土遺物

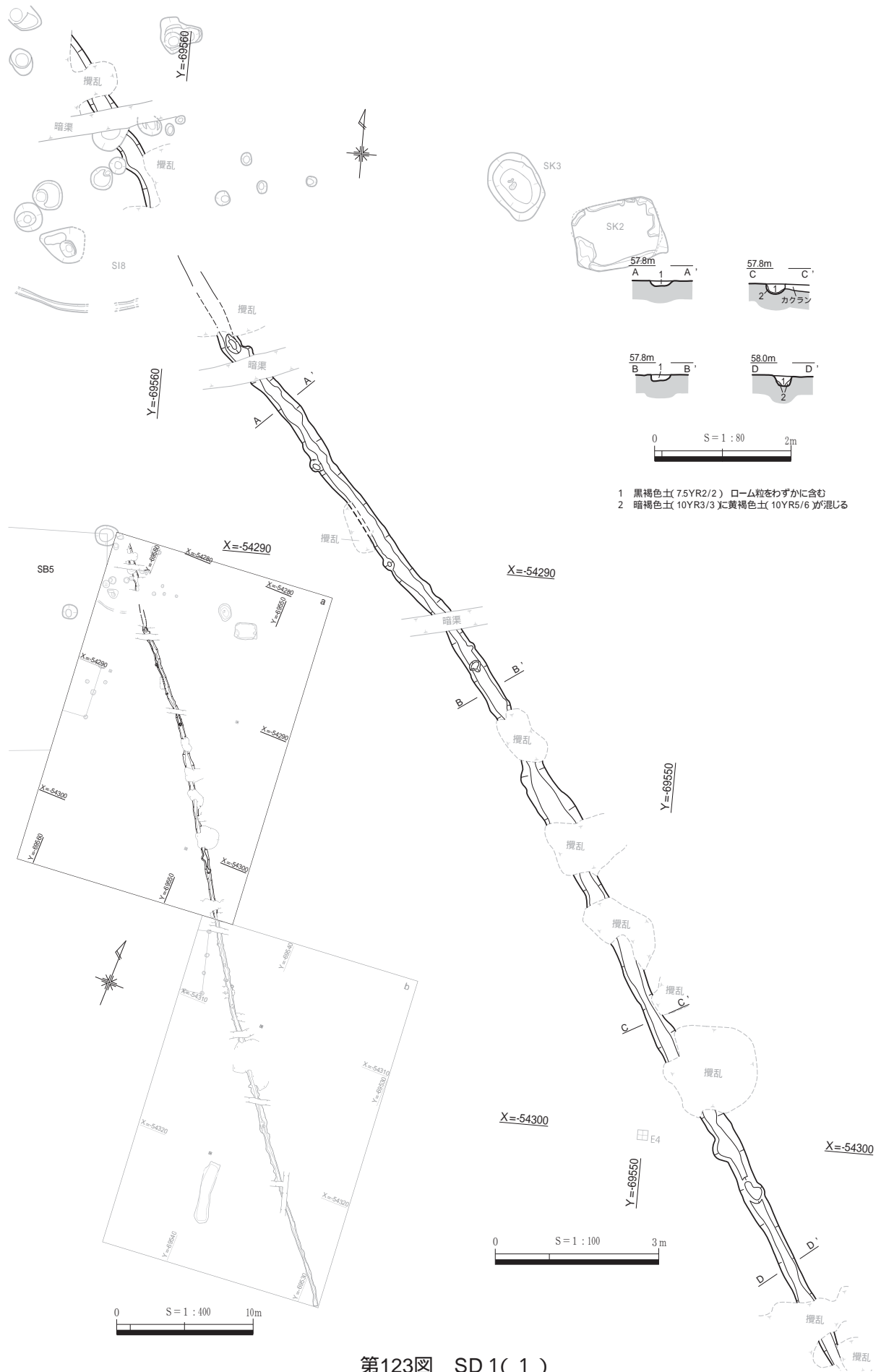
7 溝

SD1(第123・124図、PL.36)

1区の中央北寄りから南東隅にかけて、C4・C5・D3・D4・E3・F2・F3・G1・G2グリッドの範囲にある。標高57.0～58.0m付近の上部平坦面に位置する。平成21年度の確認調査におけるTr.4のSD1と対応する。この溝の南半分は、溝の等高線に沿っている。その東側の地形は急傾斜して谷に落ち込んで

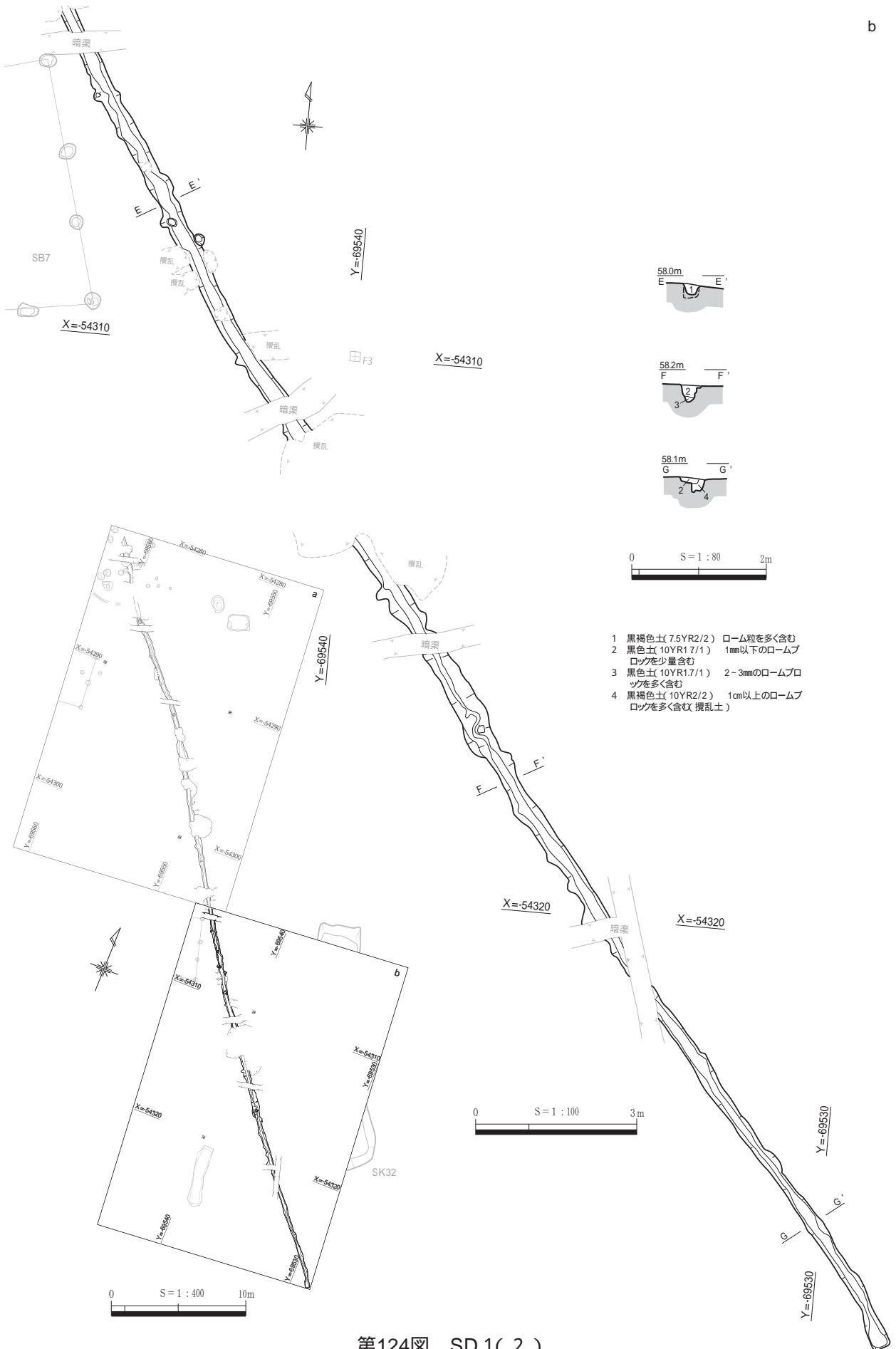


第122図 SK48出土遺物



第123図 SD 1(1)

b



第124図 SD 1(2)

第3章 調査の成果

いる。表土除去後のソフトローム層で検出された。梨畑として土地利用された際の掘削により、溝のいたる所は、暗渠や攪乱によって壊されていた。

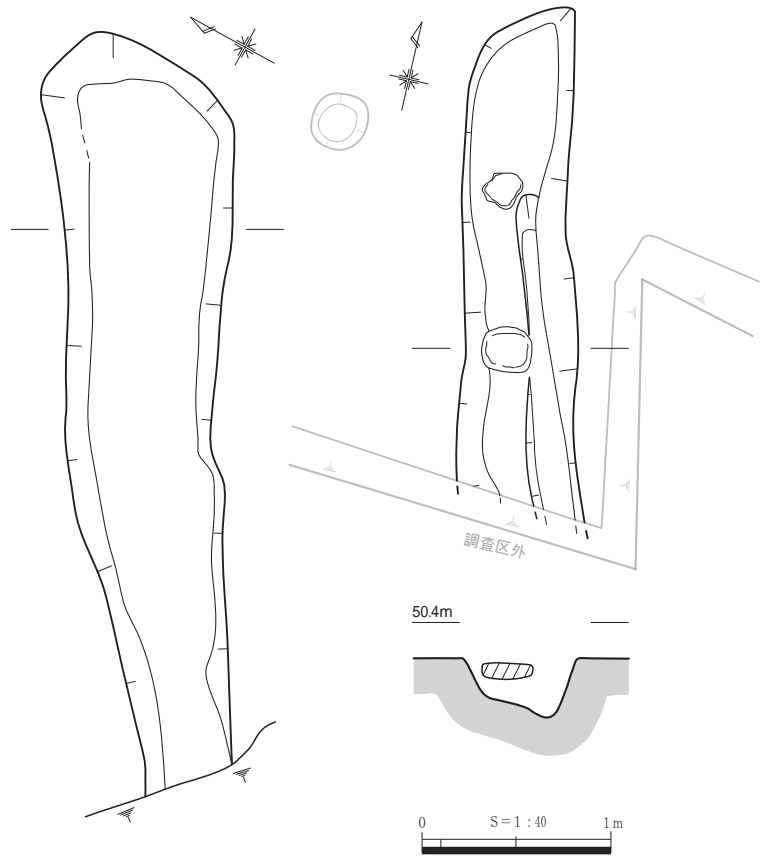
溝の南端は、調査区南壁の手前で途切れており、5区では検出することができなかった。また北端は、竪穴住居跡SI 8に切られ、この付近で途切れている。現状での長さ約57m、幅20～60cm程度を測る。断面は大部分が逆台形状で、深さは10～40cm程度を測り、北端と南端付近がやや浅くなる。方向は、概ねN - 35° - Wである。

埋土は、ほとんどが粘性の弱い黒色土または黒褐色土を主体とする単層で、一部しまりの強い部分もある。

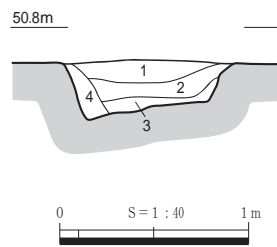
遺物は、埋土中から土器が出土しているが、いずれも小片のため、図化できなかった。

遺構の時期は、埋土や周辺遺構の状況などから、弥生時代中期後葉と考えられる。

遺構の性格は、この溝が上部平坦面の東端に位置し、これより東側の地形は谷になること、この溝以东には当該期の遺構がほとんど確認できないことなどからみて、集落の東側の境界を示す溝と考えられ、排水などの機能を併せもつ可能性がある。ただし、この溝の北側がSI 8の付近で途切れることから、集落を取り囲むものではなかったと考えられる。

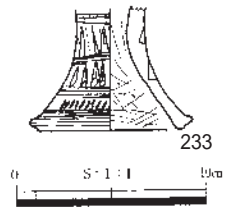


第127図 SD 3

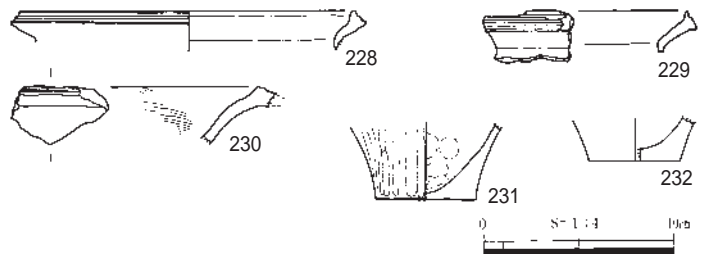


- 1 黒褐色土(10YR3/1)
- 2 暗褐色土(10YR3/3)
- 3 褐色土(10YR4/6)
- 4 にぶい黄褐色土(10YR4/3)

第125図 SD 2



第128図 SD 3 出土遺物



第126図 SD 2 出土遺物

SD 2(第125・126図、PL.36・66)

4区中央やや南寄りのE 18グリッドにあり、標高50.5m付近の下部平坦面に位置する。西側は町道によって掘削されている。クロボク層(4層)を除去した後の、ソフトローム層で検出した。

ほぼ東西に直線状に延びる溝で、長さ4.0m以上、幅0.46～0.94m、深さ4～17cmを測る。底面は緩やかに南西方向へ傾斜している。方向はN - 55° - Eである。

埋土は4層に分層でき、主に第1層から土器が出土している。下層は、地山由来の褐色から黄褐色

土となる。

出土遺物は、埋土上層から出土した弥生土器甕228・229、壺230、甕底部231・232がある。また、SK30出土の高坏191と同一個体と考えられる破片が出土している。

出土遺物から、本遺構は清水編年 - 1 様式、弥生時代中期後葉頃のものと考えられる。性格は不明である。

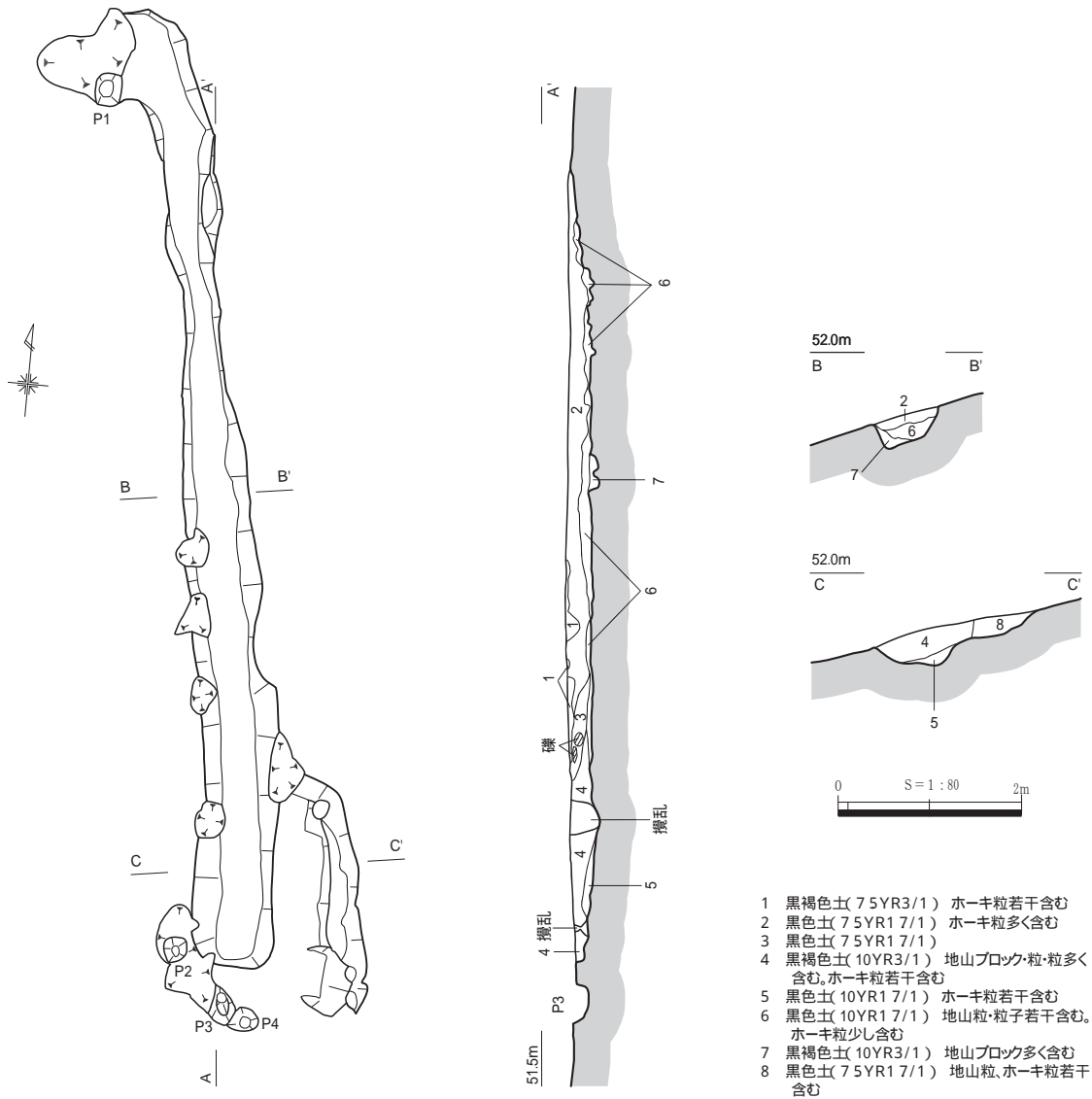
SD 3(第127・1288図、PL.37・66)

4区南東側のG16グリッドにあり、標高50.2m付近の下部平坦面に位置する。南側は用地外へ延びている。表土除去後のクロボク層からソフトローム層に至る漸移層で検出した。

ほぼ南北に直線状に延びる溝で、長さ2.6m以上、幅0.55m、深さ10～25cmを測る。底面はほぼ平坦である。主軸は、N-13°-Wである。

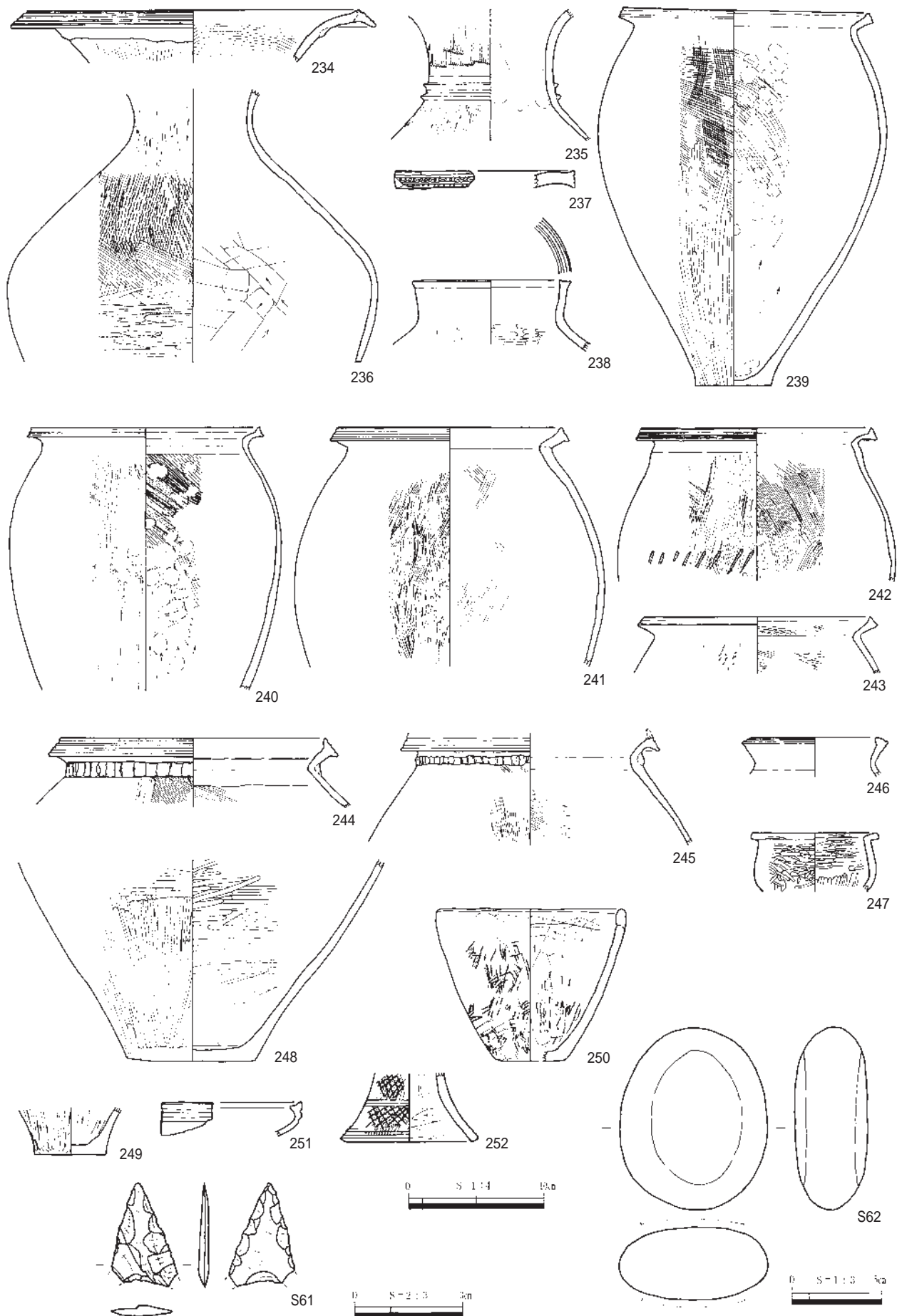
埋土は、黒褐色土単層である。

埋土中から、弥生土器高坏233が出土している。また、川原石が出土しているが、使用痕等は認め



第129図 SD 4

第3章 調査の成果



第130図 SD 4 出土遺物

られないものであった。

出土遺物から、本遺構は清水編年 - 1様式、弥生時代中期後葉ごろのものと考えられる。性格は不明である。

SD 4(第129・130図、PL.37・64 ~ 66・82・84)

3区南東側のD12グリッドにあり、標高50.7 ~ 51.6mの斜面部に位置する。造成土を除去した後のソフトローム層で検出した。南側はSK47に接続する。北側は流失している。

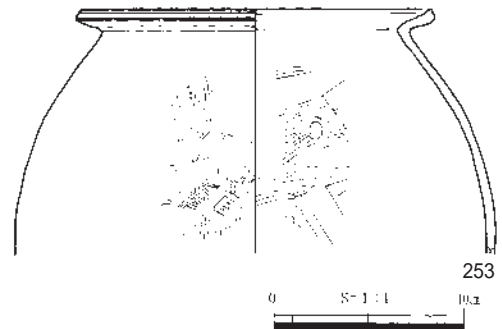
ほぼ南北に直線状に延びる溝で、長さ10.6m以上、幅0.62 ~ 0.83m、深さ14 ~ 34cmを測る。底面はほぼ平坦で、わずかに北側に向かって傾斜している。主軸は、N - 11° - Wである。

埋土は、黒色から黒褐色土系の12層に分層できた。自然堆積したものと考えられる。

埋土中から、弥生土器片が多量に出土した。このうち、弥生土器壺234 ~ 238、甕239 ~ 246、小型甕247、底部248・249、鉢250、高坏251・252、サヌカイト製石鏃S61、安山岩製磨石S62を図化した。

244・245以外は清水編年 - 1様式を示すが、244・245は - 2・3様式と考えられ、この時期が本遺構の時期を示すものと考えられ、弥生時代中期後葉のものと考えられる。

性格は不明であるが、集落を区画する溝の一部の可能性はある。

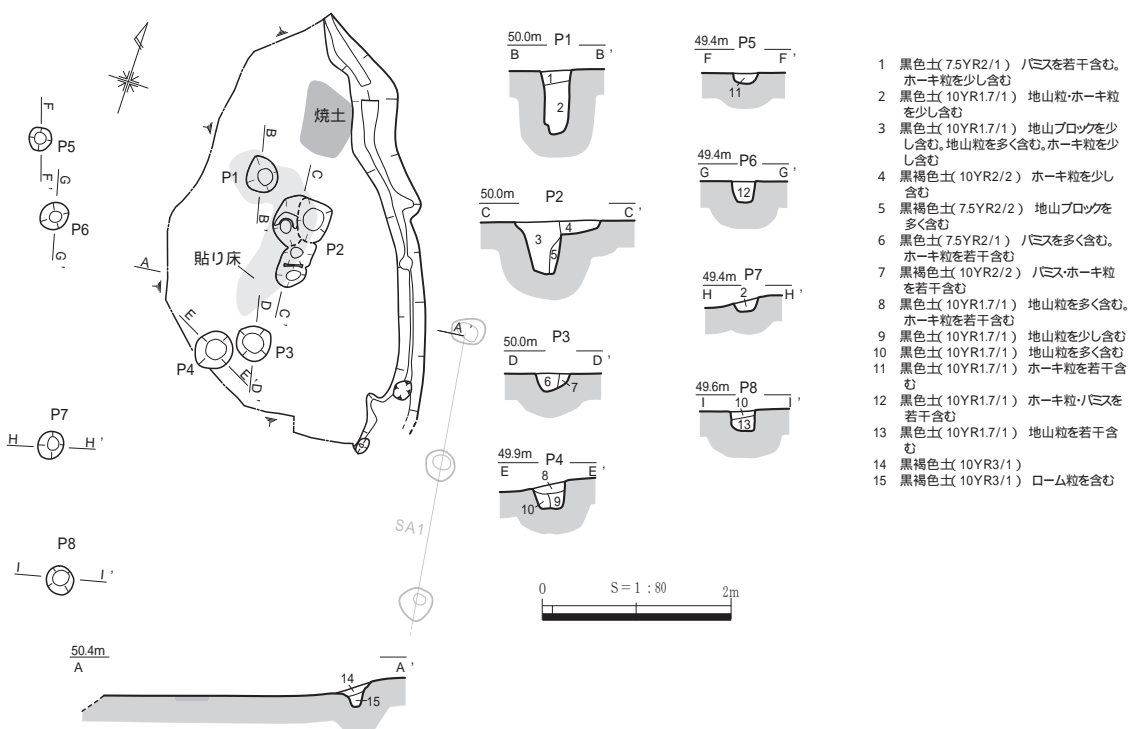


第131図 SS 1 出土遺物

8 段状遺構

SS 1(第131・132図、表28、PL.38・69)

3区中央のやや東寄りのC12グリッドにあり、標高49.8 ~



第132図 SS 1

第3章 調査の成果

50.2m付近の斜面部に位置する。造成土及び旧耕作土を除去した後のソフトローム層から谷堆積土である・層で検出した。わずかに掘り込みを確認したが、本来はもっと高い位置から掘り込まれたものと考えられる。南東側にはSA 1が隣接している。

緩斜面を掘り込み、長さ4.4m以上、幅2.7m以上の平面不整形の平坦面を造り出している。深さは、東壁際で最大10cmである。壁際には、幅20cm程度、深さ2cm程度の溝が掘り込まれている。

平坦面には、P 1～P 4のピットがあり、周辺にもP 5～P 8がある。P 2は、4基のピットが掘り込まれている。また、部分的に硬化面が残っていた。さらに、底面では盛り上がるように焼土や炭化物が検出された。

埋土は、ごくわずかしが遺存していないが、黒褐色土系の2層に分層できた。

遺物は、床面付近から出土した弥生土器甕253を図化した。

出土遺物から、本遺構の時期は清水編年-1様式、弥生時代中期後葉のものと考えられる。焼土や炭化物が出土していることから、上屋構造が焼け落ちた竪穴住居の残骸の可能性はある。

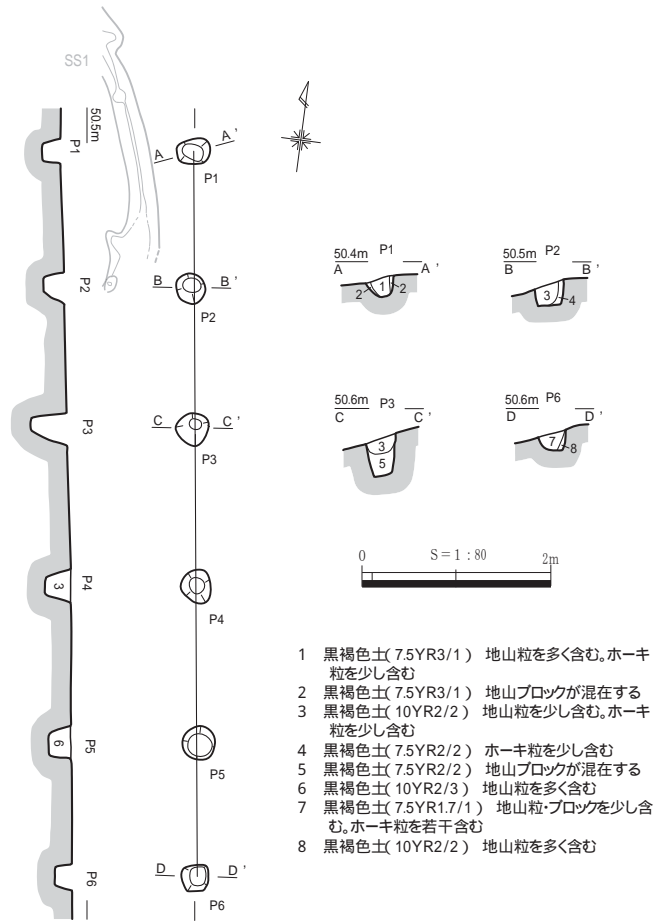
表28 SS 1ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸・深さ)cm	備考
P 1	40×35 - 60	
P 2	60×50 - 62	4基切り合う
P 3	38×36 - 21	
P 4	42×38 - 29	
P 5	25×24 - 15	
P 6	31×26 - 28	
P 7	31×25 - 18	
P 8	30×28 - 25	

9 柵列

SA 1(第133図、表29、PL.38)

3区中央のやや東寄りのC 12・D 12グリッドにあり、標高50.1～50.4m付近の斜面部に立地する。造成土及び旧耕作土を除去した後のソフトローム層で検出した。北西側にはSS 1が隣



第133図 SA 1

表29 SA 1ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸・深さ)cm	備考
P 1	36×26 - 21	
P 2	33×30 - 25	
P 3	35×34 - 43	
P 4	35×30 - 38	
P 5	36×35 - 34	
P 6	28×28 - 20	

表30 SA 2ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸・深さ)cm	備考
P 1	41×39 - 21	
P 2	71×55 - 42	
P 3	43×38 - 28	
P 4	42×40 - 29	
P 5	54×36 - 15	
P 6	40×31 - 31	

接している。

P 1 ~ P 6 がほぼ等間隔に N - 8 ° - W の方向で一直線に検出された。P 1 - P 6 間は 7.66m を測る。柱穴間距離は、P 1 - P 2 間から順に 1.4m、1.46m、1.7m、1.7m、1.4m である。

ピットの埋土は、黒褐色土単層もしくは黒色土、黒褐色土の 2 層に分層できた。

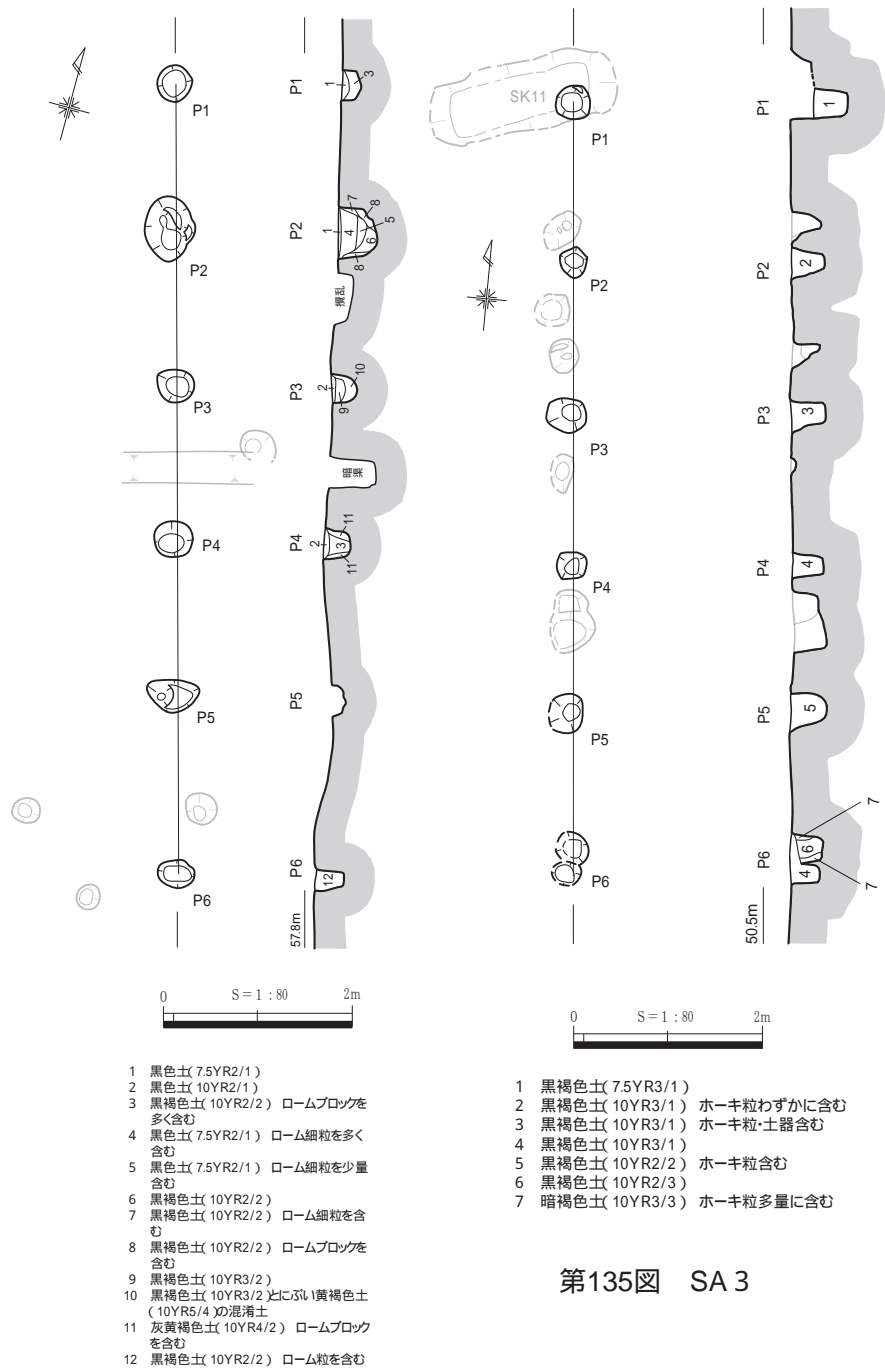
遺物は出土していないが、埋土の状況及び周辺の遺構の状況から弥生時代のものと考えられる。

SA 2(第134図、表30)

1区北西隅付近、B 6 グリッド南寄りから C 6 グリッド北寄りにかけてあり、標高 57.5m 付近の上部平坦面に位置する。北側より南側の標高がわずかに高い。表土除去後のソフトローム層で検出した。P 3 と P 4 の間を東西方向に暗渠が設けられているほかは、比較的攪乱を受けていなかった。

6基のピットを確認しており、P 1・P 3・P 4 はほぼ円形を呈し、径 0.40m 程度、深さ 0.2 ~ 0.3m 程度を測る。P 6 は楕円形を呈し、最大径 0.31m、深さ 0.31m を測る。P 2・P 5 は不整楕円形を呈し、他のピットよりやや大きい。

これらのピットは、N - 15 ° - W の方向でほぼ直線的に並んでおり、間隔は P 1 - P 2 間から順に、1.6m、1.5m、1.6m、1.6m、1.9m とほぼ等間隔である。



第134図 SA 2

表31 SA 3 ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸・深さ)cm	備考
P 1	37×36 - 59	
P 2	31×28 - 36	
P 3	42×36 - 38	
P 4	31×28 - 31	
P 5	42×36 - 41	
P 6	56×35 - 35	

第3章 調査の成果

埋土はいずれも黒色土または黒褐色土を主体とし、ローム細粒やロームブロックを含んでいる。P 4の3層は柵列の杭痕の可能性があり、杭の径は約10cmと推定できる。

遺物は、P 2とP 4から土器が出土したが、小片のため図化できなかった。

遺構の時期は、出土遺物並びに埋土の状況などから、弥生時代中期後葉ごろと考えられる。

SA 3(第135図、表31)

4区東側のE 15・F 15グリッドのピット群5内にあり、標高50.1m付近の下部平坦面に位置する。表土除去後のホーキ層で検出した。

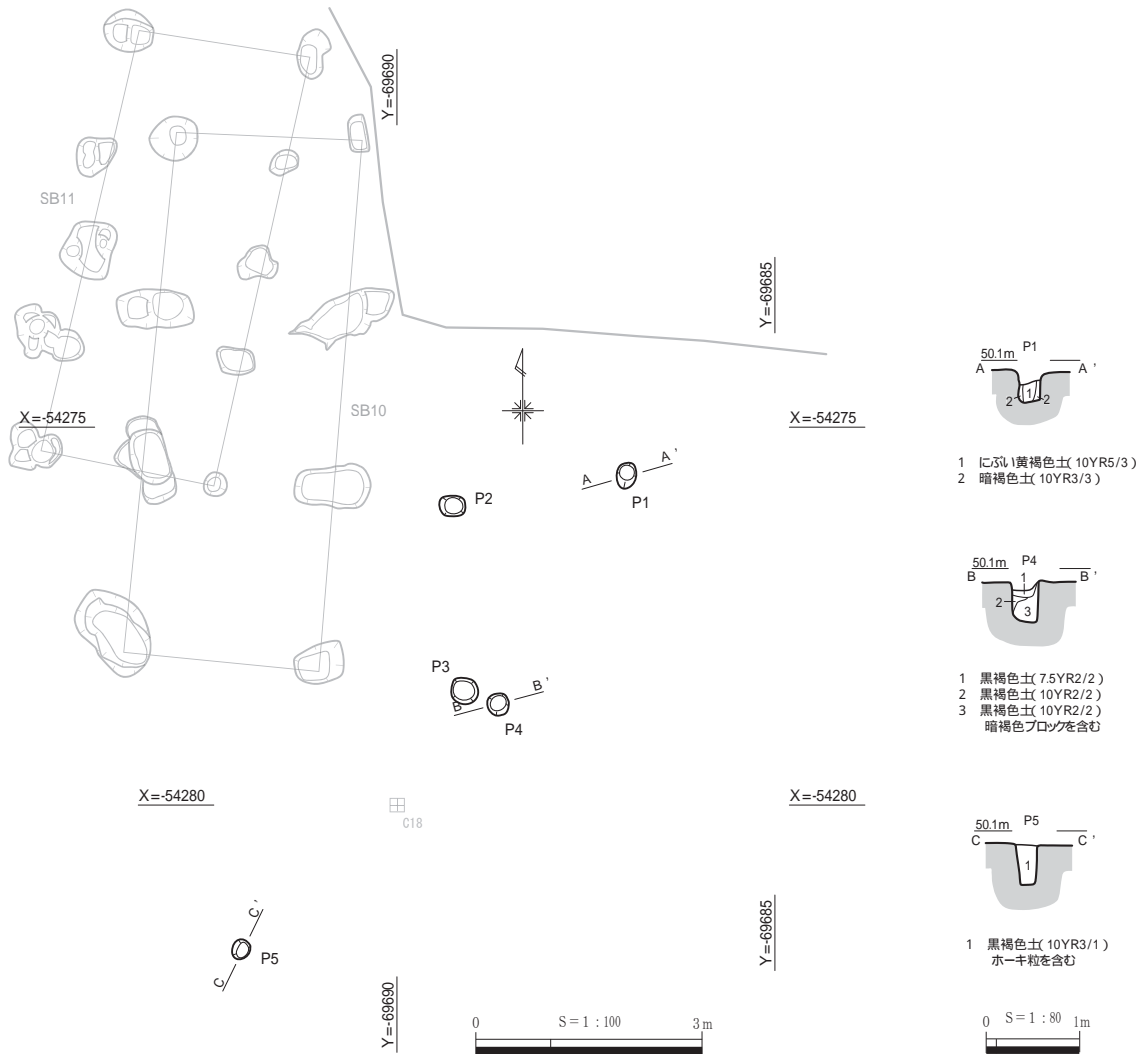
P 1～P 6がほぼ等間隔にN - 2° - Wの方向で一直線上に検出された。P 1 - P 6間は7.9mを測る。柱穴間距離は、P 1～P 2間から順に1.8 m、1.6m、1.6m、1.5m、1.5mである。

ピットの埋土は、黒褐色土が主体となる。

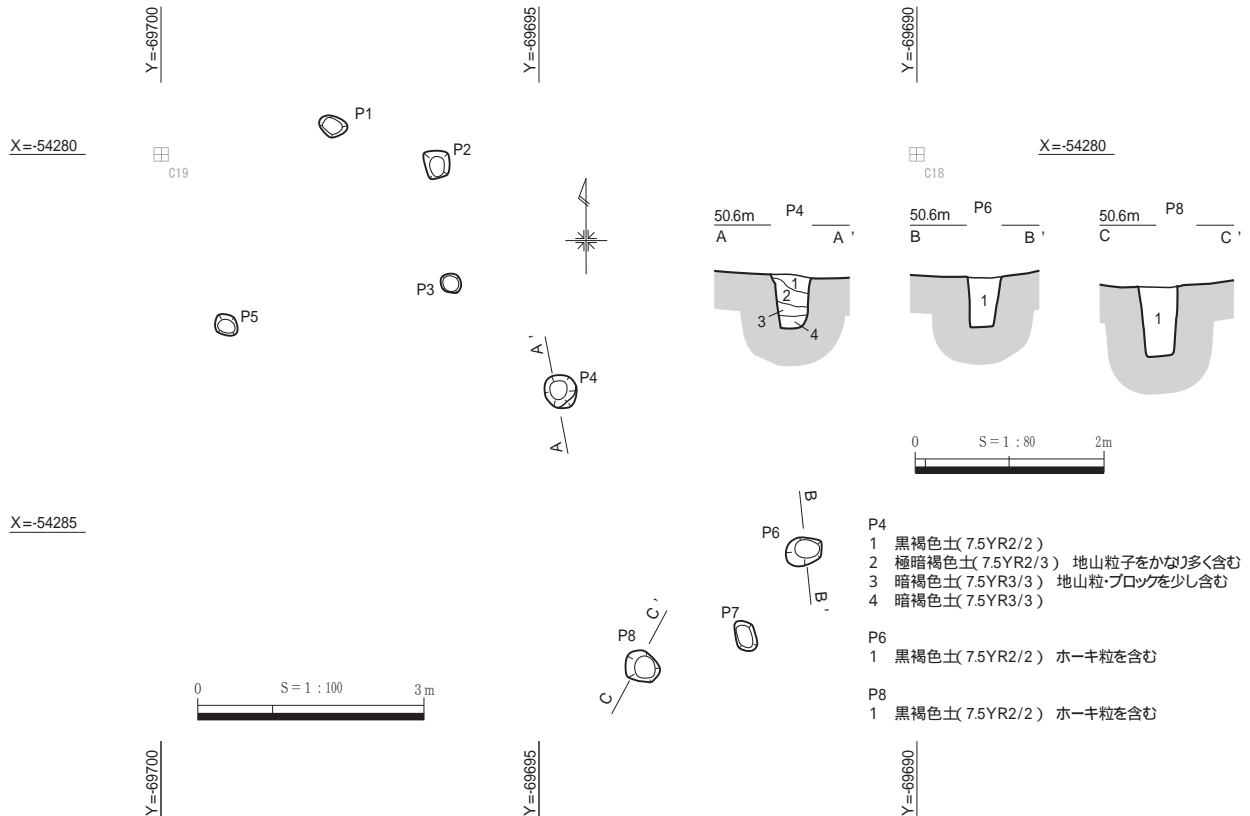
出土遺物はないが、埋土の状況等から弥生時代中期ごろのものと考えられる。

表32 ピット群1ピット一覧表

ピット番号	規模 長軸×短軸 - 深さ (m)	備考
P 1	37×28 - 29	柱痕有(径13cm)
P 2	36×29 - 25	
P 3	38×37 - 18	
P 4	32×32 - 51	
P 5	28×26 - 49	



第136図 ピット群1



第137図 ピット群2

10 ピット群

ピット群1(第136図、表32)

4区北東調査区際のB17グリッドにあり、標高49.9m付近の下部平坦面に位置する。表土除去後のホーキ層で検出した。北西側にはS B10・11が近接している。

5基のピットからなり、径26～38cm、深さ18～51cmを測る。配列に規則性は認められない。

埋土は、黒褐色土が主体となる。P1には柱痕を確認でき、復元される柱径は13cmである。

出土遺物はないが、埋土の状況等から、弥生時代中期ごろのものと考えられる。

ピット群2(第137図、表33)

4区北東側のC18グリッドにあり、標高50.1m付近の下部平坦面に位置する。表土除去後のソフトローム層で検出した。

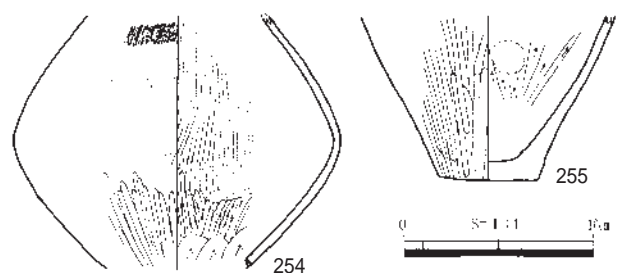
8基のピットからなり、径27～51cm、深さ12～73cmを測る。配列に規則性は認められない。

埋土は、黒褐色土が主体となる。

出土遺物はないが、埋土の状況等から、弥生時代中期ごろのものと考えられる。

表33 ピット群2ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸・深さ)cm	備考
P1	35×29-12	
P2	38×34-12	
P3	31×27-13	
P4	49×43-51	
P5	35×30-25	
P6	51×38-62	
P7	43×29-23	
P8	49×43-73	



第138図 ピット群3出土遺物

第3章 調査の成果



第139図 ピット群3

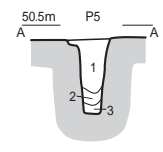
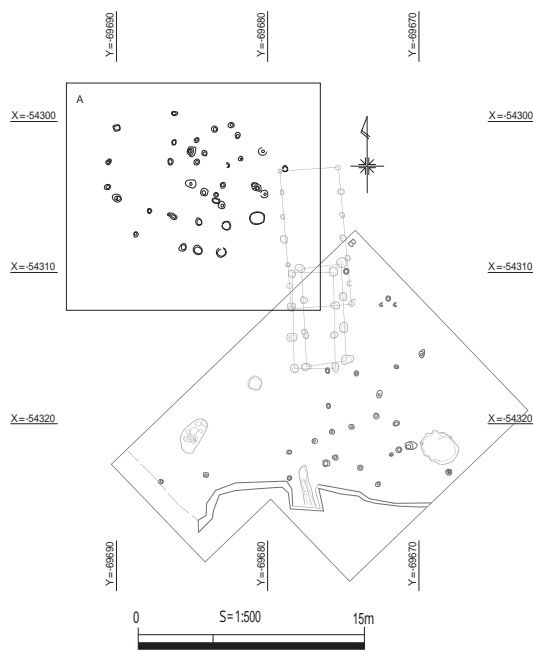
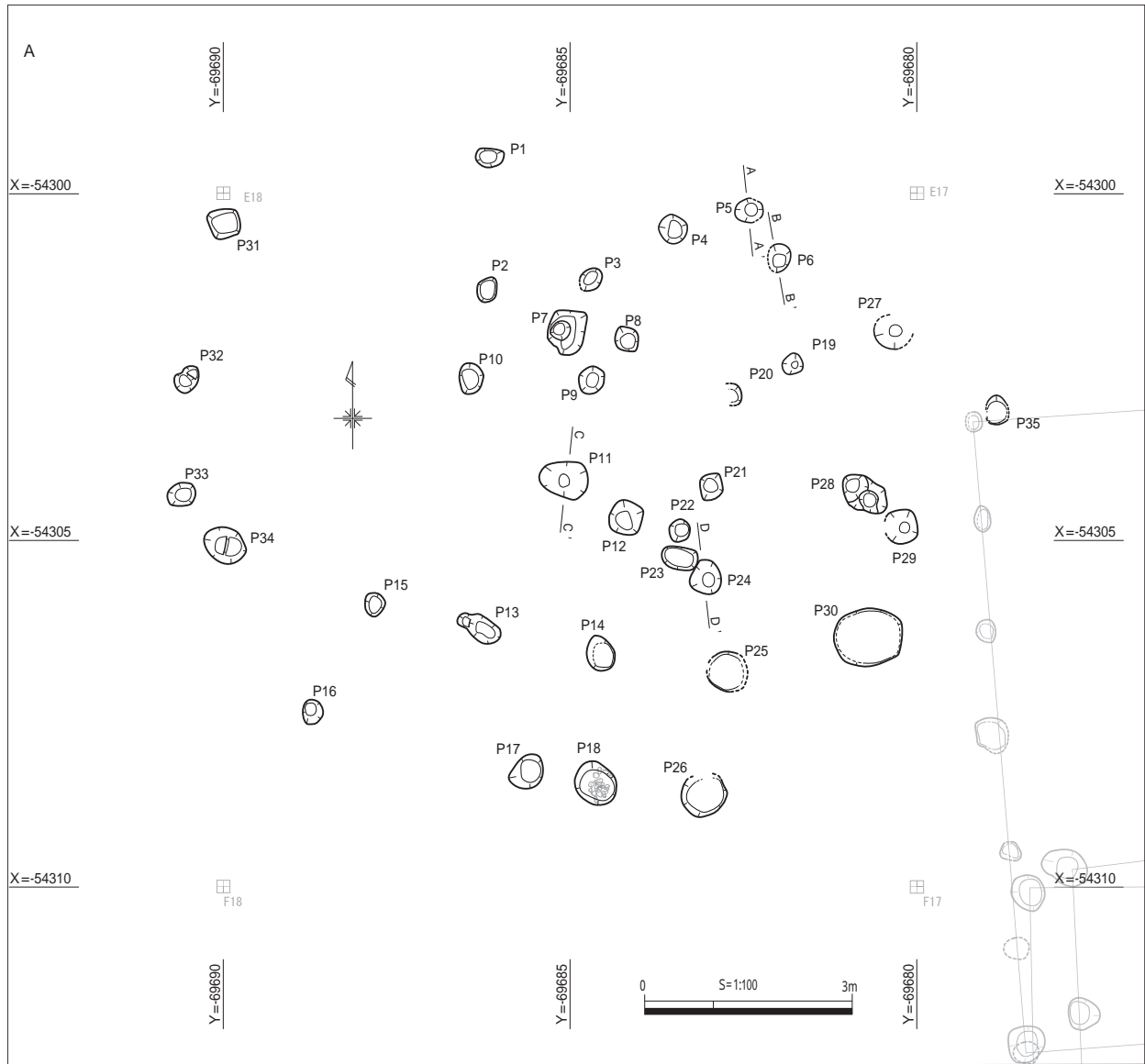
表34 ピット群3ピット一覧表

ピット番号	規模 長軸×短軸 - 深さ)cm	備考	ピット番号	規模 長軸×短軸 - 深さ)cm	備考
P 1	35×28 - 32		P 13	32×31 - 53	
P 2	58×53 - 50		P 14	45×29 - 18	
P 3	30×28 - 12		P 15	39×37 - 50	
P 4	46×39 - 29		P 16	49×44 - 40	
P 5	29×25 - 25		P 17	42×32 - 48	
P 6	67×47 - 20		P 18	48×40 - 56	
P 7	42×39 - 11		P 19	47×46 - 14	
P 8	25×24 - 20		P 20	38×36 - 26	
P 9	30×24 - 20		P 21	35×32 - 54	
P 10	43×39 - 18		P 22	46×34 - 53	
P 11	39×38 - 30		P 23	33×28 - 39	
P 12	56×48 - 26				

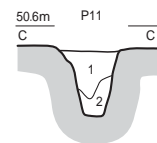
表35 ピット群4ピット一覧表

ピット番号	規模 長軸×短軸 - 深さ)cm	備考	ピット番号	規模 長軸×短軸 - 深さ)cm	備考
P 1	42×31 - 19		P 32	42×31 - 20	
P 2	39×31 - 19		P 33	42×36 - 44	
P 3	38×30 - 16		P 34	65×51 - 64	
P 4	42×40 - 38		P 35	40×37 - 17	
P 5	42×36 - 77		P 36	35×33 - 12	
P 6	43×34 - 74		P 37	24×22 - 14	
P 7	64×52 - 67		P 38	27×21 - 25	
P 8	38×35 - 36		P 39	36×30 - 25	
P 9	43×38 - 49		P 40	37×28 - 32	
P 10	46×36 - 14		P 41	36×28 - 34	
P 11	71×55 - 70		P 42	42×35 - 27	
P 12	50×47 - 71		P 43	44×36 - 41	
P 13	66×35 - 68		P 44	81×52 - 75	
P 14	53×41 - 26		P 45	40×38 - 33	
P 15	35×31 - 12		P 46	28×24 - 21	
P 16	37×32 - 58		P 47	38×34 - 20	
P 17	55×43 - 21		P 48	38×37 - 30	
P 18	66×55 - 24		P 49	41×37 - 27	
P 19	31×30 - 48		P 50	52×47 - 25	
P 20	32×18 - 24		P 51	32×29 - 14	
P 21	43×37 - 52		P 52	32×31 - 15	
P 22	35×32 - 45		P 53	36×31 - 62	
P 23	53×34 - 21		P 54	33×31 - 57	
P 24	50×46 - 60		P 55	36×35 - 30	
P 25	60×58 - 13		P 56	37×34 - 30	
P 26	68×64 - 35		P 57	37×32 - 33	
P 27	54×50 - 84		P 58	52×35 - 19	
P 28	75×49 - 57		P 59	33×27 - 21	
P 29	50×47 - 51		P 60	57×37 - 43	
P 30	100×84 - 15		P 61	40×39 - 39	
P 31	45×43 - 13				

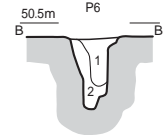
第3章 調査の成果



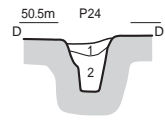
- P5
 1 黒褐色土 (10YR3/1)
 2 暗褐色土 (10YR3/3)
 3 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)



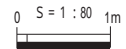
- P11
 1 暗褐色土 (10YR3/3)
 2 灰黄褐色土 (10YR5/2)



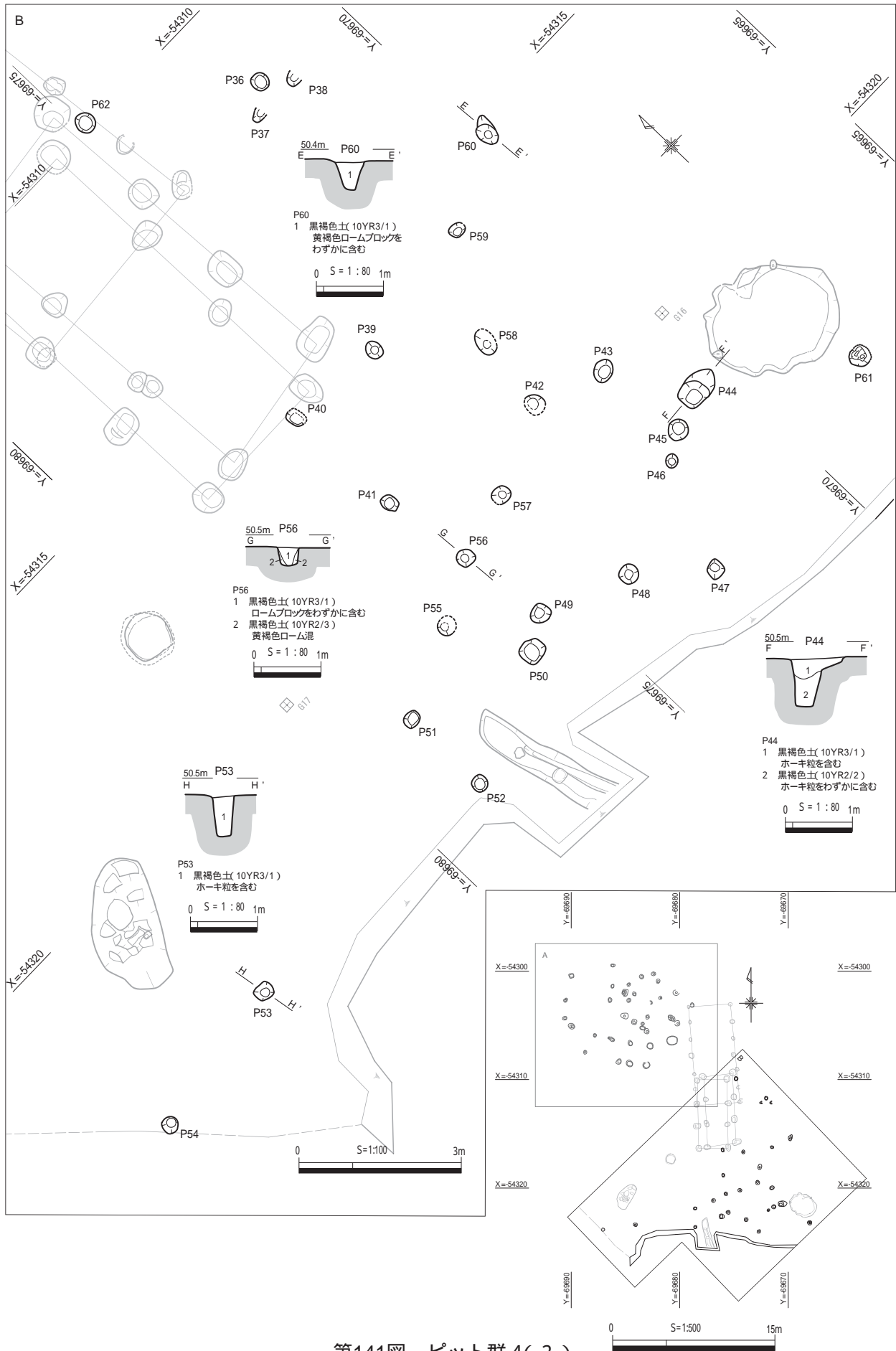
- P6
 1 黒褐色土 (10YR3/1)
 ホーキ粒を含む
 2 灰黄褐色土 (10YR5/2)
 ホーキ粒を多量に含む



- P24
 1 黒褐色土 (10YR3/1)
 2 暗褐色土 (10YR4/3)
 ホーキ粒を多量に含む



第140図 ピット群4(1)



第141図 ピット群4(2)

第3章 調査の成果

ピット群3(第138・139図、表34、PL.63)

3区北東側のC18グリッドにあり、標高50.0m付近の下部平坦面に位置する。表土除去後のホーキ層で検出した。

23基のピットからなり、径24～67cm、深さ11～56cmを測る。

埋土は、黒褐色土が主体となる。

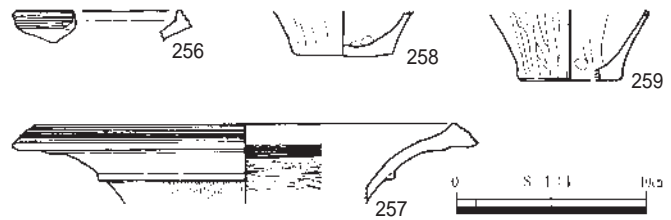
遺物は、P19埋土中から弥生土器壺253、P22埋土中から弥生土器甕254が出土した。この他にもP19、P23、P24埋土中から弥生土器片が出土した。

出土遺物から、弥生時代中期後葉ごろのものと考えられる。

ピット群4(第140～142図、表35、PL.63)

4区南東側のE17・F16・G16グリッドにあり、標高50.5m付近の下部平坦面に位置する。表土除去後のホーキ層で検出した。SB2～4を挟んで北西側と南側の小単位が認められる。

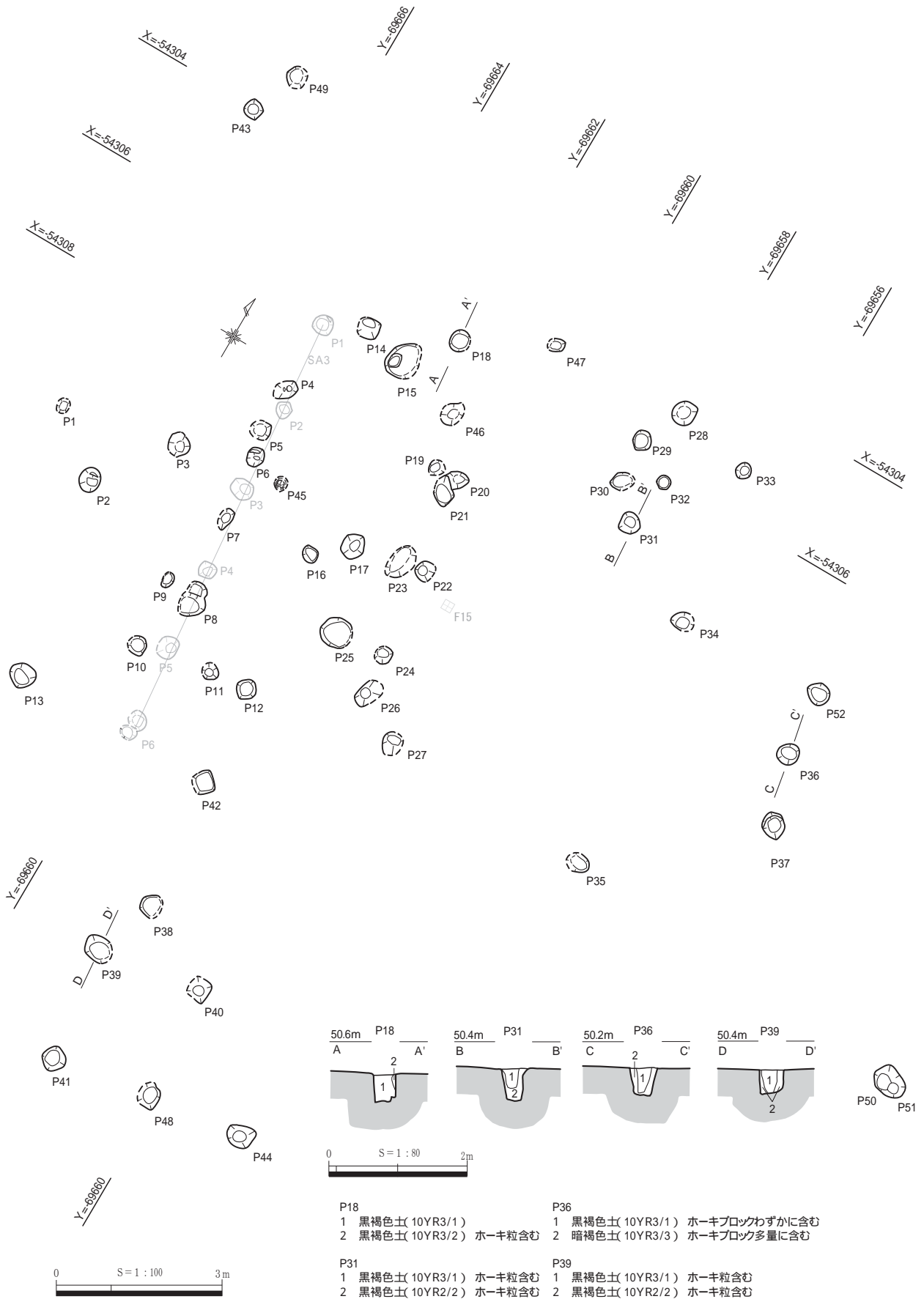
計61基のピットからなり、径18～100cm、深さ12～77cmを測る。配列に規則性は認められない。



第142図 ピット群4出土遺物

表36 ピット群5ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸・深さ)cm	備考	ピット番号	規模(長軸×短軸・深さ)cm	備考
P 1	29×22 - 17		P 27	43×37 - 38	
P 2	45×38 - 27		P 28	44×21 - 20	
P 3	43×41 - 42		P 29	39×35 - 23	
P 4	45×31 - 32		P 30	45×32 - 12	
P 5	37×34 - 31		P 31	39×36 - 45	
P 6	30×30 - 40		P 32	25×25 - 6	
P 7	40×24 - 42		P 33	31×27 - 16	
P 8	67×48 - 38		P 34	43×35 - 50	
P 9	29×20 - 14		P 35	43×35 - 39	
P 10	34×33 - 13		P 36	40×40 - 38	
P 11	32×31 - 26		P 37	50×40 - 49	
P 12	35×35 - 13		P 38	43×39 - 10	
P 13	46×44 - 44		P 39	53×45 - 30	
P 14	39×37 - 49		P 40	39×39 - 39	
P 15	72×58 - 29		P 41	41×40 - 44	
P 16	30×28 - 13		P 42	41×39 - 12	
P 17	47×42 - 28		P 43	33×33 - 26	
P 18	41×36 - 41		P 44	49×40 - 35	
P 19	31×29 - 40		P 45	28×24 - 26	
P 20	33×32 - 22		P 46	49×37 - 45	
P 21	56×38 - 28		P 47	30×23 - 20	
P 22	35×34 - 26		P 48	46×40 - 24	
P 23	67×41 - 15		P 49	41×37 - 18	
P 24	32×30 - 10		P 50	49×34 - 30	
P 25	60×54 - 21		P 51	42×29 - 31	
P 26	57×34 - 20		P 52	42×39 - 15	



第143図 ピット群5

第3章 調査の成果

埋土は、上層が黒褐色土、下層が暗褐色から灰黄褐色土となるものが主体となる。

出土遺物には、P 7埋土中から弥生土器壺257、P 18埋土中から弥生土器甕底部259、P 49埋土中から弥生土器甕256・258が出土した。この他にもP 5、P 12、P 15、P 28、P 34、P 35、P 38、P 48、P 49、P 59埋土中から弥生土器片が出土した。

出土遺物256・257は、清水編年 - 1 様式、弥生時代中期後葉ごろのものと考えられ、本遺構も同様の時期のものと考えられる。

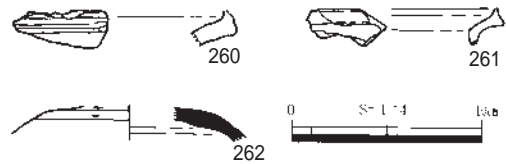
ピット群 5(第143・144図、表36、PL.63)

2 区南西側の E 14・E 15・F 14・F 15グリッドにあり、標高50.0m付近の下部平坦面に位置する。表土除去後のホーキ層で検出した。群内にSA 3 がある。

計52基のピットからなり、径20 ~ 72cm、深さ6 ~ 50cmを測る。配列に規則性は認められない。

埋土は、黒褐色土が主体となる。

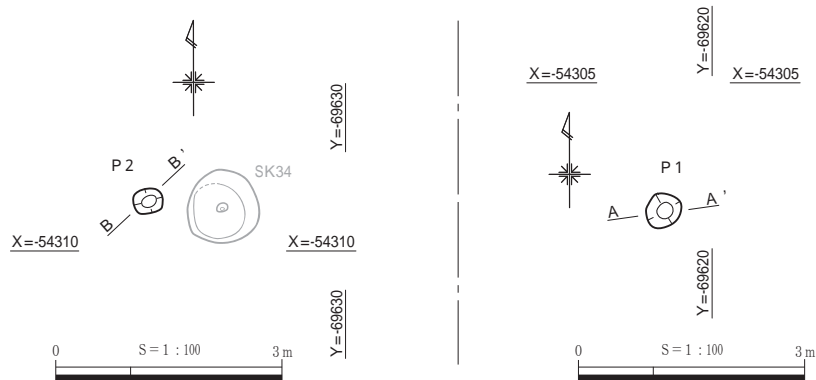
遺物は、P 17埋土中から弥生土器甕261、須恵器坏蓋262が出土したが、262は、後世の耕作による攪拌で混入したものとする。また、P 47埋土中から弥生土器甕260が出土した。この他にもP 1、P 9、



第144図 ピット群5出土遺物

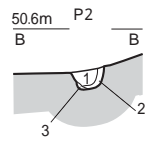
P 10、P 12、P 18、P 27、P 29、P 31、P 45、P 46、P 49、P 52埋土中から弥生土器片が出土した。

260・261は、清水編年 - 1 様式、弥生時代中期後葉ごろのものと考えられ、本遺構も同様の時期のものと考えられる。

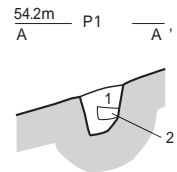


ピット群 6(第145図、表37)

2 区東側の F 10・F 11グリッドにあり、標高50.5 ~ 53.8m付近の斜面部に位置する。表土除去後のソフトローム層及びハードローム層で検出した。離れた位置関係ではあるが、群として記載することとする。



- 1 黒褐色土(7.5YR2/2)
φ 1mm以下のロームブロック粒子を若干含む
- 2 黒褐色土(10YR2/2)
φ 1mm以下、1mm ~ 1cmのロームブロック粒子をやや密に含む
- 3 黒褐色土(10YR2/2)
φ 3 ~ 5mmのロームブロック粒子を密に含む



- 1 黒褐色土(7.5YR2/2)
φ 1mm以下、1mm ~ 1cmのロームブロック粒子を密に含む
- 2 黒褐色土(7.5YR2/2)
φ 1mm以下、1mm ~ 1cmのロームブロック粒子を密に含む

第145図 ピット群 6

2 基のピットからなり、P 1 は(47 × 44 - 47)cm、P 2 は(40 × 33 - 21)cmを測る。

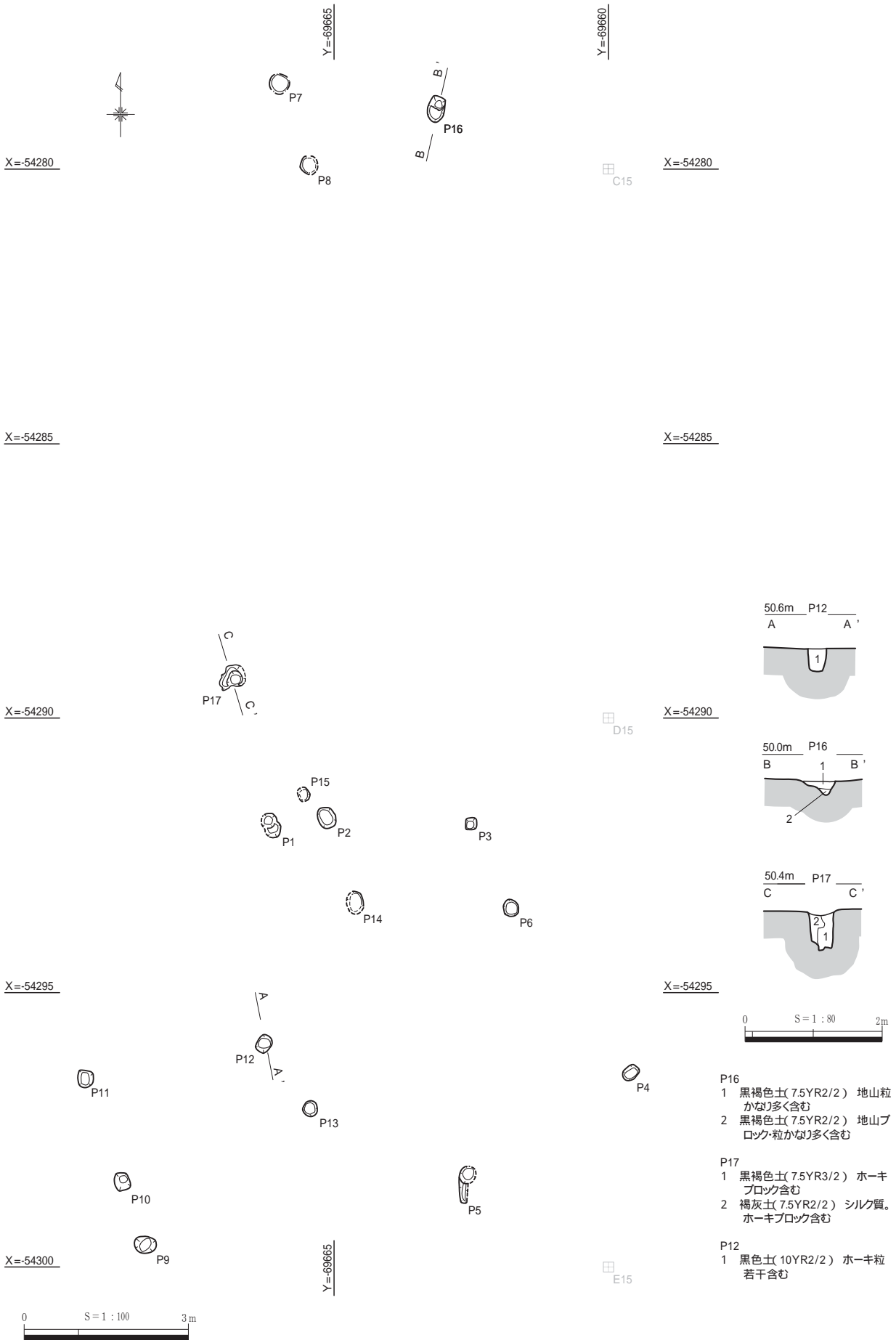
埋土は、黒褐色土が主体となる。

遺物は、P 1埋土中から弥生土器片が出土したが、図化できなかった。

表37 ピット群 6 ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸 × 短軸 - 深さ)cm	備考
P 1	47 × 44 - 47	
P 2	40 × 33 - 21	

第4節 弥生時代の調査成果



第146図 ピット群7

第3章 調査の成果

詳細な時期は不明であるが、弥生時代中期ごろのものと考えられる。

ピット群7(第146・147図、表38、PL.63)

3区南西のB15・C15・D15グリッドにあり、標高49.5～50.0m付近の下部平坦面に位置する。表土除去後のホーキ層で検出した。

計17基のピットからなり、径20～68cm、深さ9～63cmを測る。

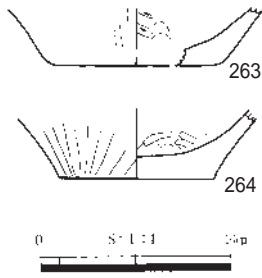
埋土は、黒褐色土が主体となる。

遺物は、P2埋土中から弥生土器底部片263、P11埋土中から262が出土した。その他にP4・P5・P6・P9・P16から弥生土器片が出土したが、図化できなかった。

詳細な時期は不明であるが、弥生時代中期ごろのものと考えられる。

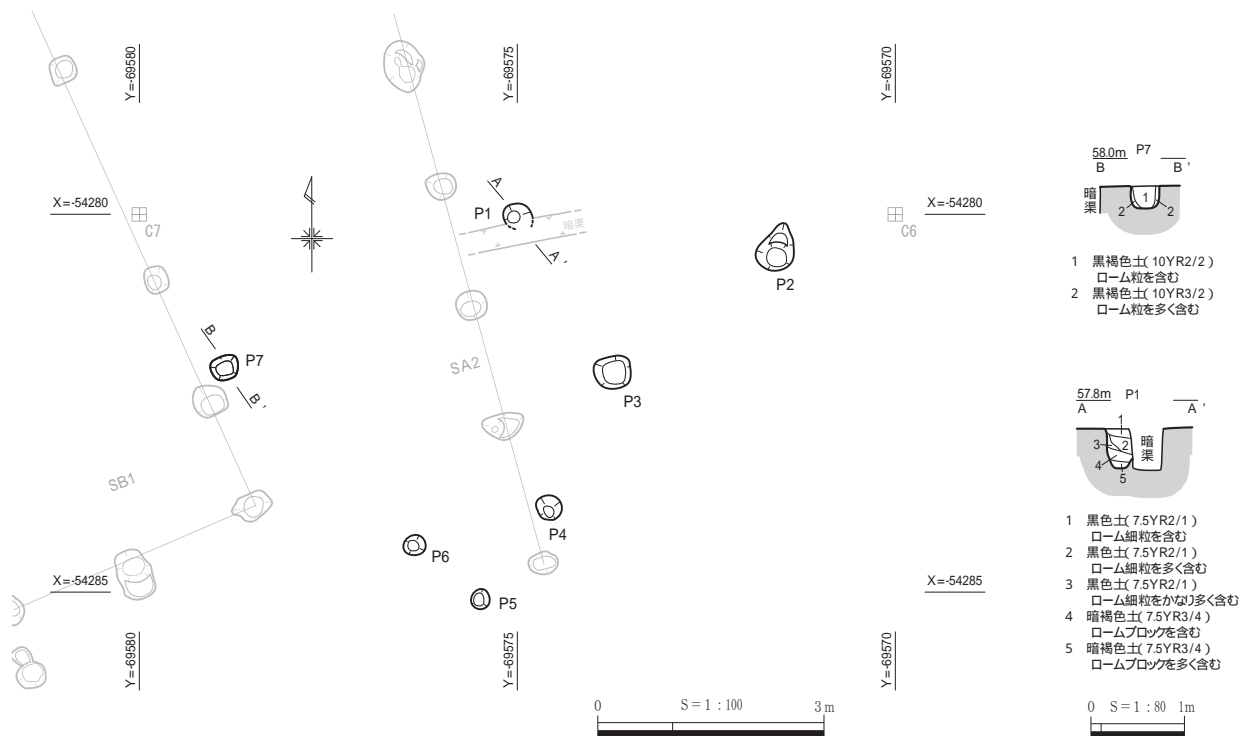
表38 ピット群7ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考
P1	48×30-63	
P2	39×32-30	
P3	22×20-27	
P4	32×23-14	
P5	68×28-26	
P6	31×30-21	
P7	36×36-16	
P8	33×33-14	
P9	40×30-19	
P10	32×28-20	
P11	32×29-28	
P12	34×26-38	
P13	28×28-9	
P14	42×30-22	
P15	25×21-26	
P16	47×32-24	
P17	55×44-41	



第147図 ピット群7出土遺物

ピット群8(第148図、表39)
1区北西隅付近のC6グリッド北寄りにあり、標高58.0m



第148図 ピット群8

付近の上部平坦面に位置する。表土除去後のソフトローム層上面で検出した。ピット群内とその付近にSB1とSA2がある。

7基のピットからなり、径25～65cm程度、深さはP1が42cm、P7が24cmを測る。配列に規則性は認められない。

埋土は、いずれも黒色土や黒褐色土、暗褐色土を主体とし、ローム粒やブロックを含む。

出土遺物は確認できなかったため、詳細な時期は不明であるが、周辺の遺構との関係からみて、弥生時代中期ごろのものと考えられる。

遺構の性格は不明である。

表39 ピット群8ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸・深さ)cm	備考
P 1	38×27 - 42	
P 2	66×51 - 31	
P 3	48×44 - 30	
P 4	35×33 - 18	
P 5	28×26 - 20	
P 6	30×29 - 17	
P 7	39×37 - 24	

ピット群9(第149・150図、表40、PL.63)

1区北西隅付近の調査区西壁沿い、C7グリッド西寄りにあり、標高57.5～58.0m付近の上部平坦面に位置する。表土除去後のソフトローム層で検出した。

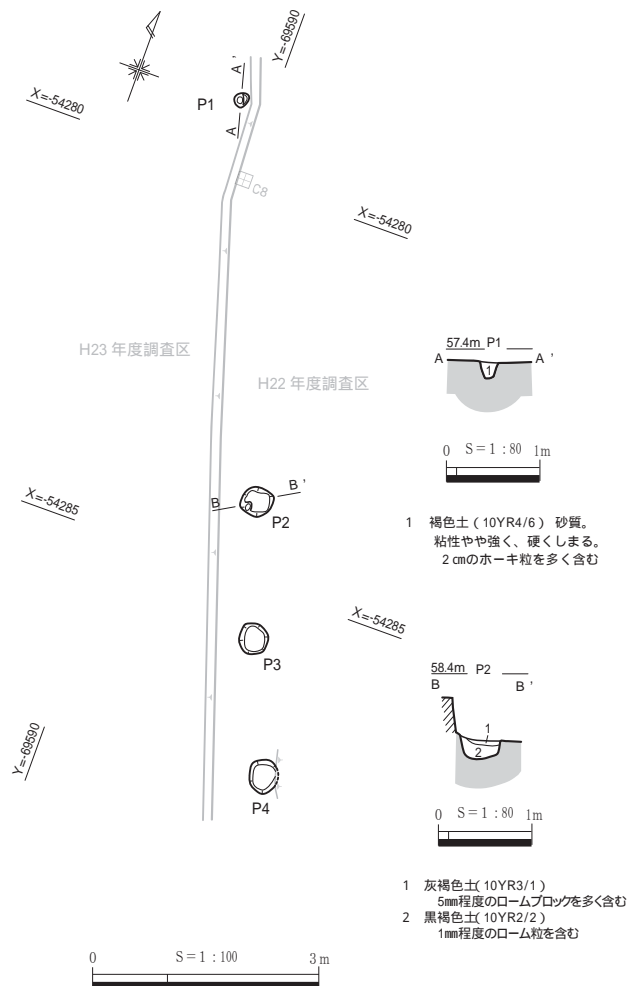
P1～P4の4基のピットからなる。規模は径20～45cm程度で、深さはP2からP3の順に、23cm、27cm、14cmを測る。

P2～P4は、N-21°-Wの方向でほぼ直線的に並んでおり、P2-P3間の間隔が1.8m、P3-P4間が1.8mと等間隔である。

埋土は、黒褐色土を主体としており、ロームブロックを含むものもある。

遺物は、P3の埋土中から弥生土器が出土した。265は甕の口縁部片である。

出土遺物は清水編年 - 3様式に相当し、時期は弥生時代中期中葉ごろと考えられる。遺構の性格は、3基のピットが一行に並ぶことから、掘立柱建物跡の東側柱穴列に当たる可能性があったが、道路下部の調査では確認できなかった。



第149図 ピット群9

表40 ピット群9ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸・深さ)cm	備考
P 1	20×17 - 17	
P 2	46×41 - 23	
P 3	42×40 - 27	
P 4	47×40 - 14	



第150図 ピット群9出土遺物

第3章 調査の成果



第151図 ピット群10

ピット群10(第151・152図、表41、PL.63)

1区中央の北寄り、B4・C4・C5グリッドにある。標高57.5m付近の上部平坦面に位置する。表土除去後のソフトローム層で検出した。ピット群内にSI8がある。

17基のピットからなり、径20～40cm程度、深さはP4が41cm、P15・P17が25cmを測る。各ピットの配列に規則性は認められない。

埋土は、黒褐色土を主体とする。P4とP15の埋土からは、柱または杭の痕跡が確認でき、推定できる柱または杭の径は、P4が14cm、P15が7cmとなる。

P1内で甕266・267が出土しており、これらは清水

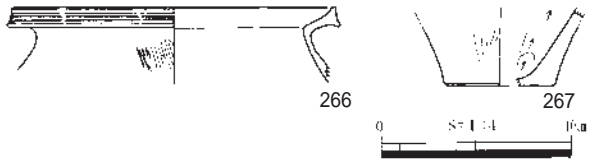


表41 ピット群10ピット一覧表

第152図 ピット群10出土遺物

ピット番号	規模(長軸×短軸・深さ)cm	備考	ピット番号	規模(長軸×短軸・深さ)cm	備考
P1	21×17-34		P10	23×17-16	
P2	31×30-22		P11	43×25-32	
P3	34×30-37		P12	33×31-23	
P4	28×27-41	柱痕跡有(径14cm)	P13	45×43-17	
P5	31×26-24		P14	35×29-28	
P6	20×20-36		P15	21×17-25	柱痕跡有(径7cm)
P7	24×20-47		P16	29×24-29	
P8	24×20-16		P17	28×26-25	
P9	19×16-15				

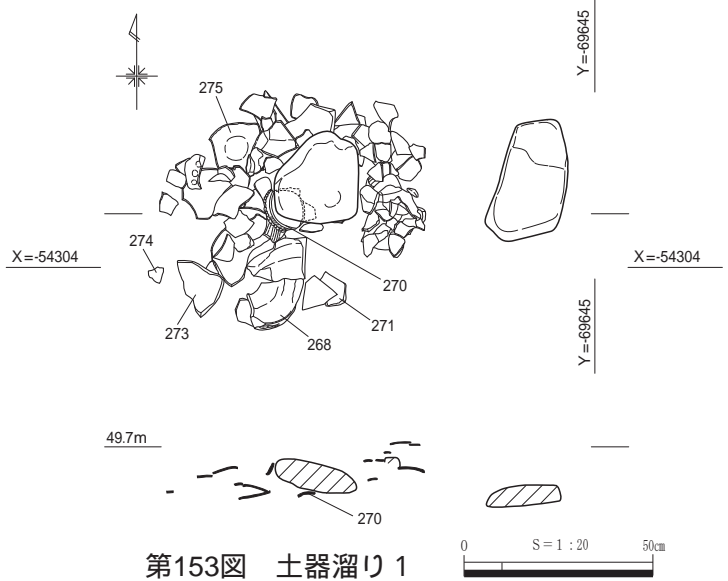
編年 - 2・3様式、弥生時代中期後葉ごろのものと考えられる。

11 土器溜り

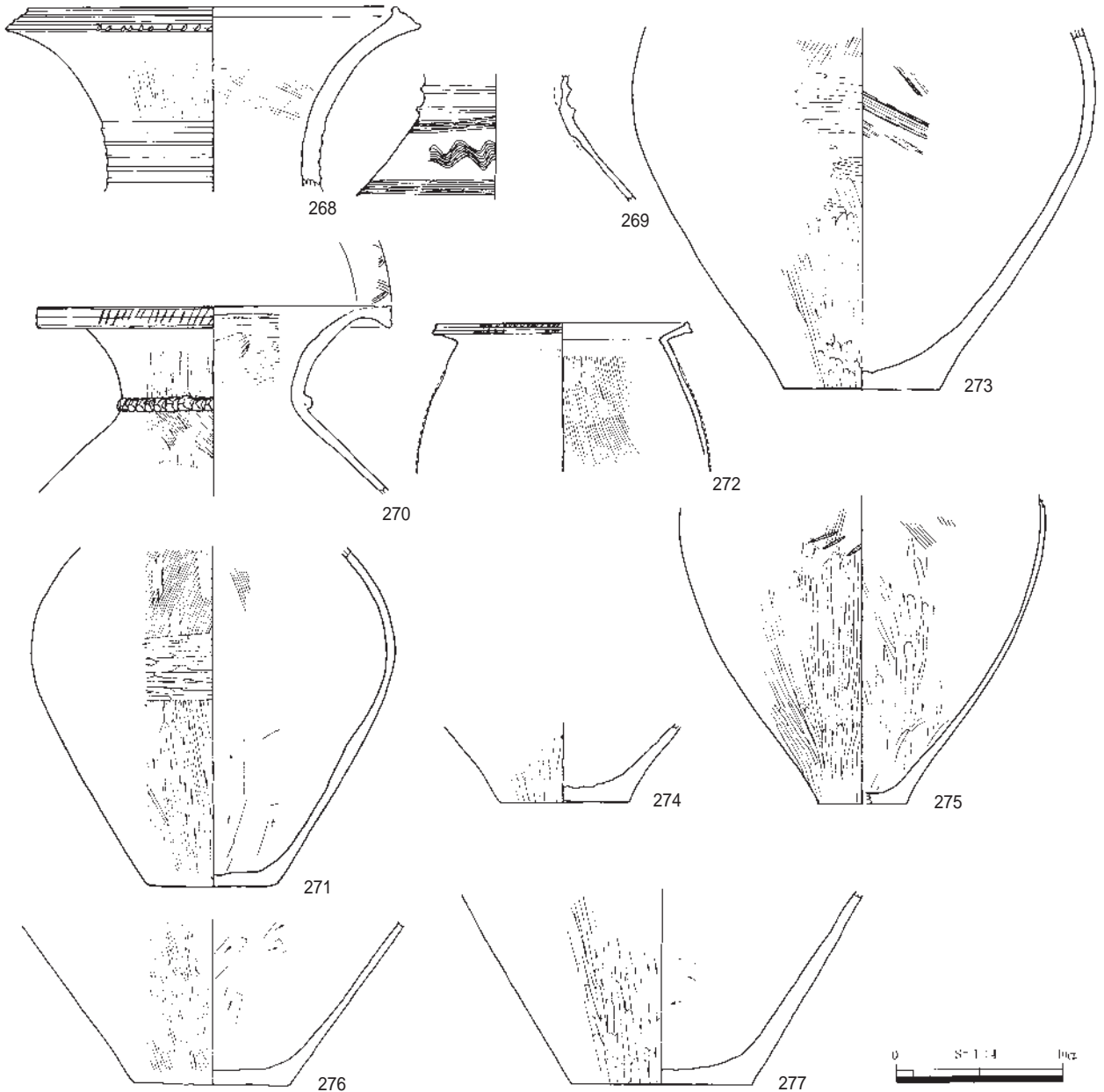
土器溜り 1(第153・154図、PL.39・67)

2区東側のE13グリッドにあり、標高49.5m付近の谷部に位置し、層中で検出した。西側約2mには、SK22がある。

壺、甕類とともに大型の自然礫2個が検出された。図化したものには、壺268～270、壺体部から底部271、甕272、甕体部

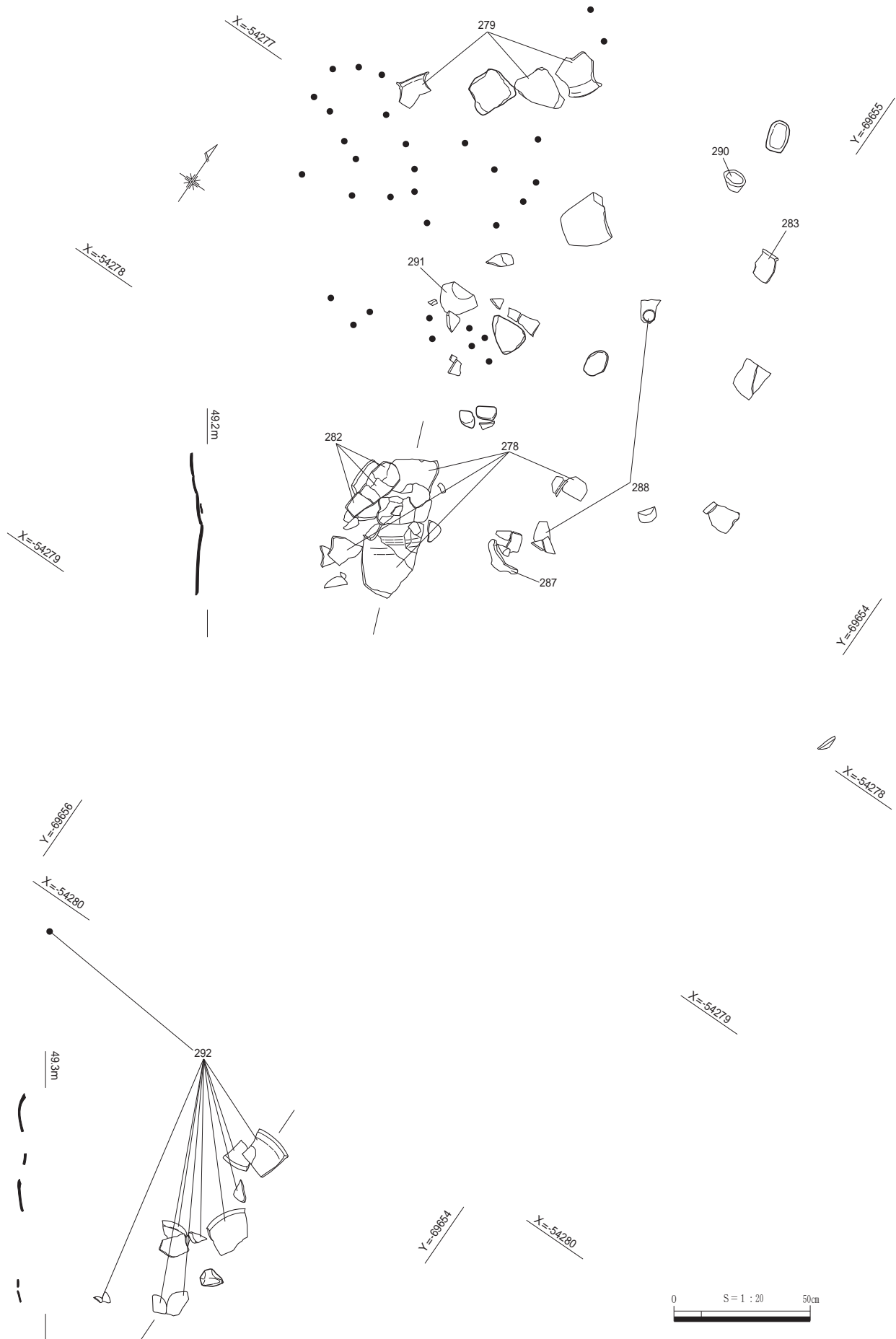


第153図 土器溜り 1

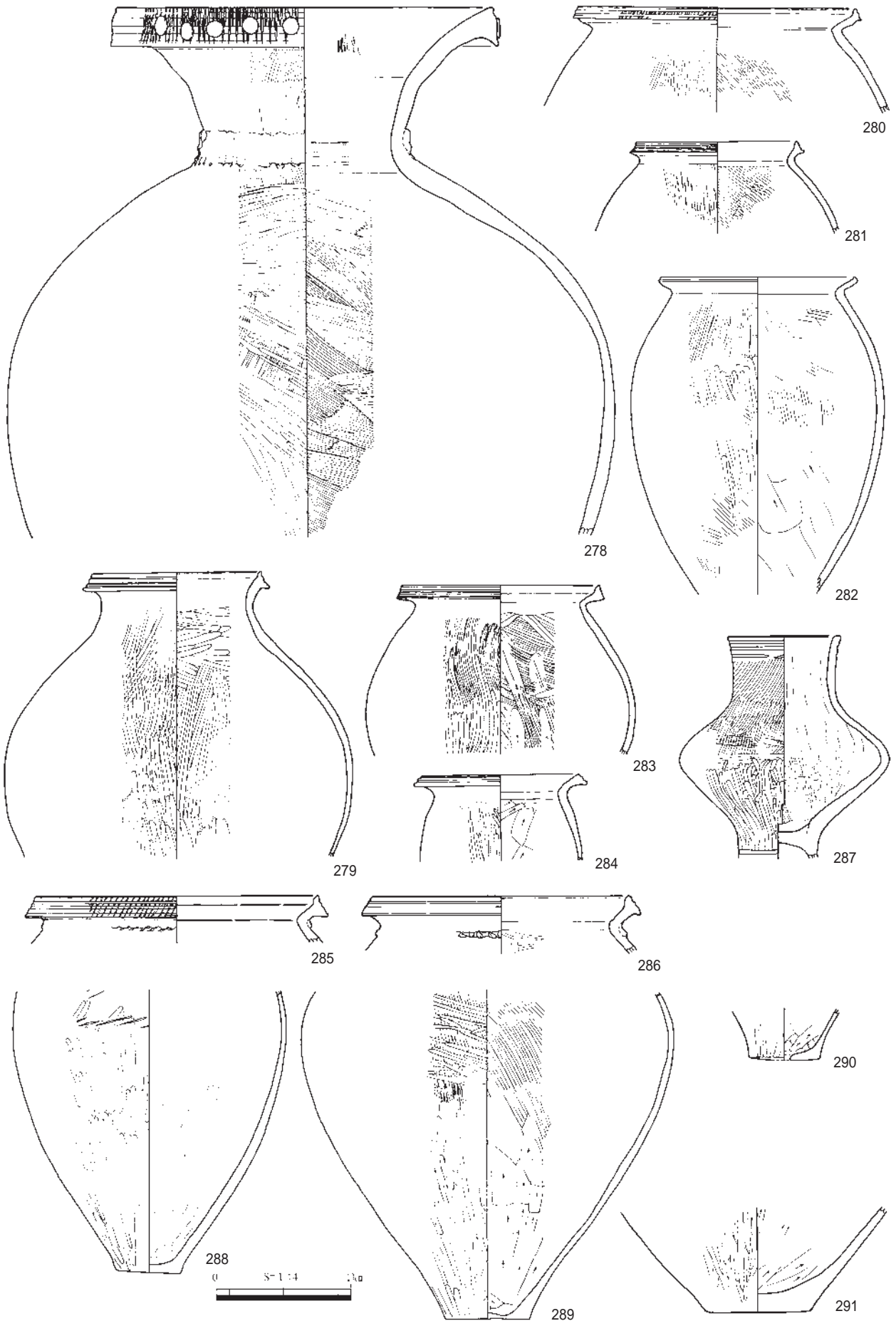


第154図 土器溜り1出土遺物

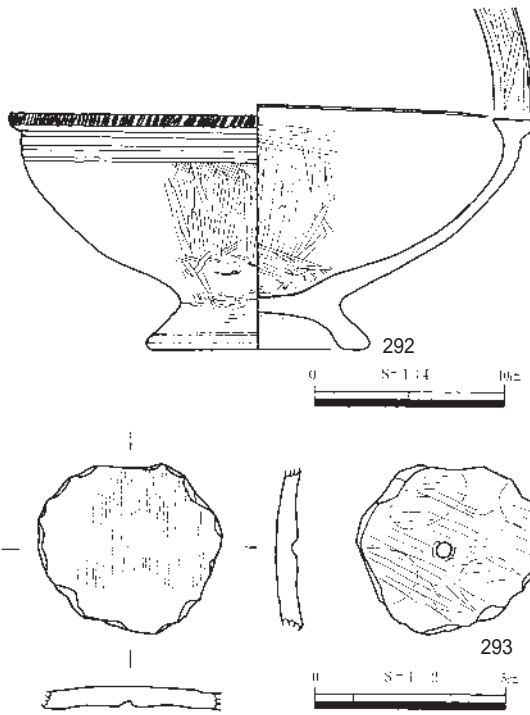
第3章 調査の成果



第155図 土器溜り 2



第156図 土器溜り2出土遺物(1)



第157図 土器溜り2出土遺物(2)

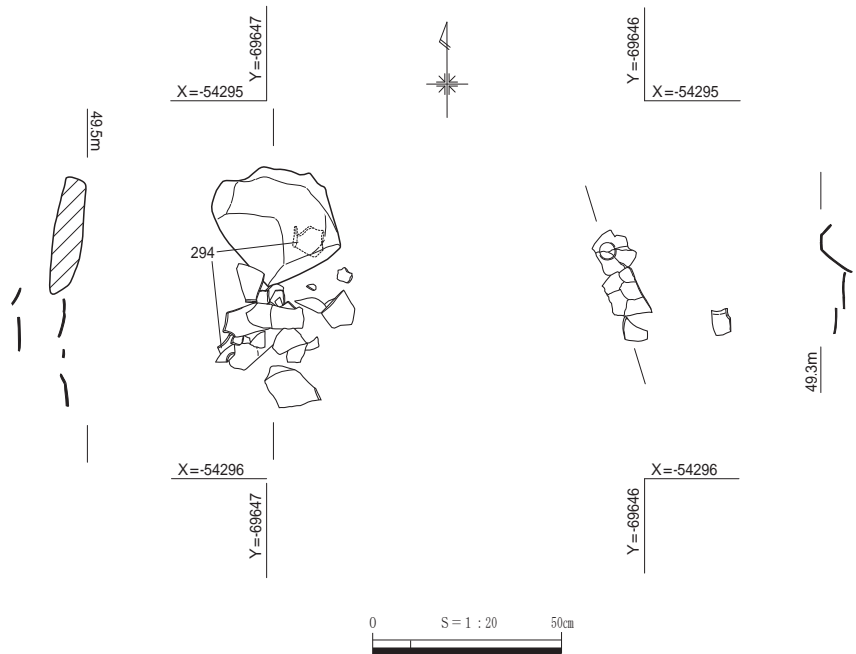
ごろのものと考えられる。

土器溜り3(第158・159図、PL.39・68)

3区中央北寄りのD13グリッドにあり、標高49.3m付近の層中で検出した。

壺などとともに大型自然礫が散在していたが、他の土器溜りに比べて遺物は少ない。図化したものには、壺293がある。

これは、清水編年-1様式、弥生時代中期後葉ごろのものと考えられる。



第159図 土器溜り3

から底部にかけての破片273～277がある。自然礫には使用痕等は認められなかった。

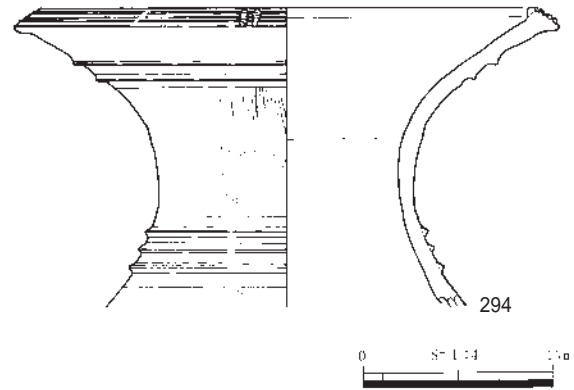
これらは、清水編年-1様式、弥生時代中期後葉ごろのものと考えられる。

土器溜り2(第155～157図、PL.39・66～69)

3区中央北側調査区際のB14グリッドにあり、標高49.2m付近の谷部の層中で検出した。

壺、甕、高坏などが南北約5m、東西約2mの範囲でまとまって出土した。図化したものには、壺278・279、甕280～286、脚付直口壺287、底部288～291、高坏292、土器転用紡錘車未成品293がある。

これらは、清水編年-1様式、弥生時代中期後葉



第158図 土器溜り3出土遺物